17-147
№14990

佛國ビリヨン閲
日本加古義一編

佛教源流論

明治廿三年一月刊行

日本國ニ於テ
純粹ノ心ヲ以テ
正義ノ者ニシテ

眞

及道及命 (音翰十八卅八)
ヲ入シ來ニ世瀚 (音翰十卅章)
ス真ノ苍與 (同 壹 章)
ヲ探スベシ

婆羅門教論序

余は今を距る九年以前京都に來り佛教の大略を調る爲め聊か暇を偷て各宗の本山に至り數同佛教の儀式に遇ひ佛教の儀式が公教の儀式に能く似る事を認む即ち明治十三年五月淨土宗派の僧宗總本山知恩院に於て日本全國淨土宗派の僧侶が集り善導大師千二百年忌の法會を執行す此時五百餘名の僧侶が教正の前驅後從一一大行列を以て儀式に與り皇族華族及各宗の教正も行列の中に在り恭詣の老若男女は恰も蟻の群る如く流石に廣き境内も立錐の地を見ず瞳

を定て儀式の容を見に僧侶の禮服も行列の順序も教正の擧動も拜禮の規則も讀經の詞節も咸な公教の儀式に似り恃る一の導師が格段に伽陀即ち禮讃を唱へ數多の僧侶が同音に聲を揃て之を續き間る鈴を鳴す等は毫も公教の儀式る異なる所なかりし又た明治十六年四月一日向宗大本山本願寺假本堂る於て親鸞上人に見眞大師の號を賜し祝と爲て法會を執行し一大行列を以て見眞大師の額を衆人に示す此時の儀式は公教の聖人の開張の儀式に似り世界漫遊の或る佛國皇族が尾張名古屋の本願寺別院に於て之と同じ儀式を見て京都に來り余る告て曰く佛教の儀式は公教の儀式に等し是は公教の儀式を寫たる者なるべしと又た明治十八年二月眞言宗大本山東寺に於て弘法大師一千五十年忌の法會を執行し皇太后宮を初め數多の貴顯紳士が集り僧侶は衆人の前に於て恭く儀式を擧げ燒香を爲し供物を捧ぐ此時の儀式も亦た公教の儀式に似り余は此外に幾度も佛教の儀式る遇ひ之る遇ふ毎に佛教の儀式が公教の儀式に似る事を認め佛教の儀式は全く公教の儀式を模る者なるべしと思へど證據

なければ人に語る事も成り難く殆ども心を惱し佛教の根本なる天竺に至り梵字の書籍を調べらんには必ず証據を認むる事あるべしと獨り西の空を眺め忙然たる事も在りが天主の惠に依り余は滿足を與ふる者なれ出たれ其は今同出版せる婆羅門教論 Brahmanisme てふ書籍にて是は世界の學者社會に有名なる天竺の南ポンジセリ Poudichery 領に在る聖公會の大主教ラヴエナシ Lavouanan 公が万里の道を遠と爲ず天竺各地を巡廻し三十五年の間に調べ揭し古跡の証據と多年螢雪の勞を積で漸く探り得し古典の証據に依り佛教の根本を示す爲め婆羅門教に遡り明治十八年に出版せし婆羅門教論てふ原書より肝要の所を拔萃し日本文章を以て日本佛徒の目醒と爲る者にて價直ある書籍なり最早日本の學者は感服す可き道理を悟り維新以來西洋の學術を研究し止を得ず本國の在る亞細亞洲の舊事且聖書の証據に依り世界の根本と定る舊天竺國の事物を研究す可き場合に至り古跡を調べ古典を譯し專ら之に注意する傾向あり其中高名の大鳥圭介氏は明治廿年七月學士會員の演說會場に於て印度誌編制の主意を述べ

大家論集第八編の七十六枚目に氏が印度誌の緒言を載せり之に依て見る時は天竺の古跡を調ふる事は亞細亞洲の舊事を悟る爲め最も肝要の業なるべし東本願寺の石川舜台師は夙に此事を知り明治七年に新門跡を勸め天竺の古跡を調べ佛教の根本を探る爲め天竺へ渡し事は人の能く知る所なり夫より東本願寺は熱心に學者を拵へる事を望み南條文雄笠原研壽の兩氏を英國へ送り文部省の大學校に於てマックシムレール Max Muller と云ふ學士に從ひ梵字の研究なさしめたり兩氏は已に卒業し歸朝の後は學士の名稱を帶て學者社會に學者の運動を爲し南條文雄氏は明治二十一年五月京都に來り寺町の大雲院に於て外國紀行の演說を爲し天竺の事柄も詳に述て人の歡を引り佛教の本山に於て天竺の調を爲す事は殊に肝要なるべし時勢の進歩に從ひ日本の學者が漸次に進歩し万國の學者の說に適ふ說を吐に至り寔に歡き事なり此機に際し此婆羅門教論の出版は幾分か未だ人の知ぬ事を掘り出す便と成ならんか尤も婆羅門教論 Brahmanisme と云ふ名に就て賤めし或は忌む人あるべし如何となれば佛教の經文に於

て婆羅門教を外道と賤め邪教と忌たる者なればなり併し釋迦が當時の賤む可き忌む可き風俗習慣を改る爲め佛教を立て婆羅門教を攻擊し一大變革を爲されど不知不識婆羅門教の哲學に染られて之を全く除き得ず正き原書に依て調る時は矢張婆羅門教に佛教の根本を認む る者なり大坂の天主堂に在て長く傳道に從事せし小嶋準治てふ人あり此人は餘程佛教を調たる人にて辨疑小言と云ふ書を著し佛教の根本を示して道く

虛根の佛教は元來婆羅門教の餘涎を啜り万物一体一性の說を唱ふれど如來とか世尊とかを揑造して慢りに之を尊敬せしむるに至る況んや釋迦Shakyaは佛陀と覺者と尊稱せらるゝも自ら禪覺したる處一理もあるなく皆な婆羅門教の四經即讚誦伏陀Rig Veda 娑磨伏陀Sama Veda 夜殊伏陀Yadjur Veda 阿闍婆拏伏陀Atharva Veda 三傳即婆羅門Brahmana 修多羅Sutra ウパニシヤダUpanishada 幷ま其時代の六學派即僧企耶Sankiya 瑜伽Yoga 因明Nivaya 鞨崽迦Vaiseshika 伏陀多Vedanta 彌祢娑Minasa 中んに就て瑜伽學派の說を採み自家撞着虛實混淆の逆理を

唱へて衆生を昏迷の途に惑溺せしむる毒虫なりと謂ざるを得ず故に今一二の證を擧げん抑も万物一体万法無自性は四經三傳及び六學派の通說にして輪廻は即ち瑜伽及び伏陀多學派の混淆說なり又た地獄 Naraka と閻魔王 Yamarāja は即ち摩拏 Manu 法輪の說修羅 Asura 天間 Deva 夜叉 Yasha 羅刹 Rakshasa は即ち婆羅吸摩伏陀經の說なり彼の座禪觀念は即ち瑜伽の餘涎をして禪覺見性は即ち伏陀多學派の說なり又た苦集滅道 Ariyasatiyani は即ち伏羅吸磨の伏陀經及び伏陀多の說にして涅槃 Nirvana は即ち伏陀多の餘涎入涅槃則出離煩惱滅盡一切習氣不生不滅無智無得等の說は即ち瑜伽學派の說正覺即ち遠離一切顚倒夢想而究竟涅槃の說は即ち因明及び伏陀多の說五蘊皆空一切顚倒夢想諸法皆空想の唯心說は即ち瑜伽及び伏陀多の說聲聞緣覺菩薩阿彌陀 Amitabha 觀音 Avalokitsvara 勢至 Mahasthama 淨土 Sukhavati 十地 Dasabhumi 三身 Varikatuba 等の如きは即ち釋迦親說の教理に非る事明らけし乞ふ耳ある者は聽くべし目ある者は視るべし良心ある者は分別すべし噫々

之に依て佛教は婆羅門教を賤め婆羅門教を忌み仡ら婆羅門教の哲學を悉く傳へ事を知る可

余が初て京都に來りし頃は公教の傳道を拒む者の間は多く在て自由に傳道を爲し得ず一年二年の暇の在り故に幸ひ佛教の調に蒐り各宗本山の學者を賴み佛教の說を綿密に聞て彼是對照し之が蘊奧を探り見る咸な哲學を骨子と爲し哲學の外に據るべき者なし尤も哲學は最上の哲學と云べき者にて昔時の學者が憤發を以て述し說を悉く網羅し寔に感服すべき程なれど惜哉万有神教を基礎と爲す故に結果は吹きれ去る風の如く空しき者なり長くビルマ Birmah 公教の傳道せし餘暇を以て佛教を調べ梵字の原書を翻譯せし有名なる學者ビガンデ Bigandet 主教が余に大切の書翰を贈り佛教の根本を探らんと欲するの念あらば哲學を研究す可し佛教の根本は哲學の中に在と告たる事あり如何も佛教の根本は万有神教即婆羅門教の哲學の中に認むる者にて鈍と雖も余が耳に聞し事を並て云へば智恩院教正鵬養徹定師の許を得て滿二年間淨土宗大學林へ通ひ岸上恢嶺教師の講義に與り倶舍論唯識論華嚴經の簡單の道理と提婆設摩の識身足論と大毘婆娑の發智論を調べ茲に六派の哲學を認む尤も余が力の足ぬ

所を知り岸上教師ハ務て分り易く親切ゴ教へ
経論の略抄なりと天台開山智者大師の四教
集註と云ふ書を授られたり呼鳴岸上教師の親
切ハ余が贈ゴ銘て忘ず余ハ此人の既に世を去
り世に孤て復ゴ遇ひ得ぬ事を恨と爲す此人に
授られたる四教集註の説を今ラウエナン Laudenan
公の説に照ー見ば婆羅門教の哲學を寫ーたる
者なりと明かゴ知らる其七十五法卽色界の五
根心法の六識心所の四十六法なんどハ皆な伏
陀多の哲學の理論ゴ組立たる者ゴ婆羅門
教論第三卷に詳ゴ説り其後眞言宗管長三條西
師の許を受け東寺に於て高野山出張大講師の
講義ゴ與り四種曼陀羅の大器ゴ眞言宗の開基
弘法大師の十住心論を調べ是ハ婆羅門教論第
三卷ゴ在る如ゴ瑜伽部の理論ゴ組立たる者
なる事を知り禪宗相國寺教正狹野獨園師の講
義を聞き是も亦ゴ婆羅門教論第三卷に在る如
ゴ喬答摩の因明論ゴ耀崇迦の理論ゴ組立た
る事を知り次に日蓮宗本國寺の三村教正に親
ゴ聞ー法華經の説ゴ余が手に在ーブルヌフ Burnouf
ゴ云ふ學士が梵字の法華經を翻譯せー書籍
を照ー見て大に驚ゴる事あり蓋ー三村教正

は授果剛因の道理より依り一心三觀より出さる無座三身佛切の結果一即三三即一の玄義と題目の奥意を最と分り易く教へ而て己が意思の外に物なしと示されし是は聊か哲學の書を讀人の能く知る如くゼルマン German の万有神教の歡く可き誤謬の學者フヒスト Fichte 及ヘーゲル Hegel 等が哲學の格言を爲し意思は我なり Idee c est moi てふ詞に符合し大に驚べき事なり日本の佛教に於て最も盛大なる一派なる一向宗の教理を調る爲め明治十四年に幾度も寺町の佛教會談を聞に行き東本願寺の渥美契縁

師に馬鳴菩薩の因明論の講義を聞と雖も充分に悟り得ず漸く是も婆羅門教より出たる事を僅に探り尚ほ綿密に調る爲め西本願寺の赤松連城師を訪ひ曩に智恩院の大學林に於て教を受し如く西本願寺の大教校に於て教ヲ受ん事を願ミしに師は明治九年より憤發して歐洲に渡り專ら宗教と學術を研究し英國倫頓及佛國巴里に於て數多の學士と交り公教の傳道學校へ幾度も出入し頗る歐洲の事情に明き人なれば唯ならぬ親切の取扱を爲し余が願に應じ百端と周旋せられしかど道同からざれば交ら

と云ふ孔子の格言ありて許されざりし余は學問の目的なるを怪かろ答を聞もものかなと思ひど詮方なかりしが幸ひ他に親切の僧侶ありて一向宗の教理を詳く教へ余に滿足を與へられたり一向宗の組織は大に他の七宗と異り專ら淨土の三部經に依り自力を棄て他力を目的と爲し釋迦の教に從ひ佛陀誓願の助を求め四十八願ある中に十九二十の自力諸行の功德を捨て十八願の三信十念をのみ信仰の基礎と爲し南無阿彌陀佛の六字の名號に依て不可思議の信仰を堅め安心起行作業を其願に立させら

れ親鸞が叡山の寺院に於て深く此理を觀念し大に悟を開き他力本願を頻に說て日本全國に弘る者なり聖公會の信仰を模し救世の功力に擬る者なり麥羅門教論三卷五章に說る如く推察を以て組立し過去七佛の事と彌陀の說が龍樹菩薩の時代に最早天竺全國に弘る而て之は全く聖公會の信仰を模し救世の功力に擬たる者なり同し六章に說る如く親鸞の時代に支那の皇帝が基督教を弘る爲め力を盡し基督教の聖書を配布せし事あり入唐せし日本の僧も止を得ず長安城に於て基督教の聖書を見

て正き聖公會の信仰を悟り救世の功力を知り事は目に見る如く明に古跡の証據に依て顯る聞く所に依ば本山に秘藏し在る親鸞の真筆の中に基督教の聖書の寫あるよし若も之が真ならば一向宗の信仰が聖公會の正き信仰に似る根本は之なるべし一向宗の教理の講義を聞き彌陀の助を仰ぐ信仰を調べ見に聖公會の救世の信仰に能く似り余が二箇月間一心に講義を聞し正信謌は親鸞が自ら三部經を略抄せし者にて一向宗の信仰の目錄とも云べき者なり其中に驚くべき格言は歸命無量壽如來、、、、一切群生蒙光照、、、、如來所以興出世、、、、應信如來如實言、、、、ふ語あり是は他宗の哲學と大に異り毫も天竺の佛説の原書に據たる所なし余は耳を傾て幾度も聞き又た心を籠て幾度も考へ全く公教の聖書より模さる如き語なる事を知る是はイザヤス Isaias の豫言に出りオグスチン Augustin 聖人の述し如く救世の功力は万民を助る聖寵の奥義を摸せし者にて正信謌は末に至りマハヤナ Mahayana 即大乘經の菩薩の採に足ぬ説も在ど幾分か正き信仰を以て基礎と爲し事は余が殊に驚くる所なり都て儀式は裝飾も禮服

も拜禮も僧侶の階級も御文章を讀む詞節も皆な支那の天台山より來れる大悲懺てふ式書より成立たる者なて聖公會の儀式を摸せ一者なり婆羅門教論三卷六章に在る古跡の証據を見て知る可一斯ると云へば余を過言者と思ふ人も在ならん然ど余は數年相續で之を調べ各宗本山の僧侶に就て儀式の根本を質と雖も充分に答辨する僧侶なーも今の日本の佛教は原の印度の佛教と大に異り支那と日本の間は成立た る新ーき者はて儀式は公教の儀式を摸せ一者なり余は、百端の証據に依り今の日本の佛教の

儀式は公教の儀式を摸せ一者なて之を組立一年代は支那に公教の盛なりー後なりと斷言す兎も角も本国に於て有名の僧侶が歐洲に渡り歐洲の學者に遇て諸科の學術を研究ー自ら佛教の理に合ぬ事を悟り得て日本に歸り忽ち今の日本の佛教は誤り多ー改良せざるべからずとの說を立て頻に人を勸むる者あり一を掲て云へば西本願寺の北島道龍師の如き即ち之なり如何なる理由にや推察あれ余が聞ー佛教各宗の中に於て一向宗は格別に公教を摸たる者に他て彌陀の一体の他力を頼み眞の信仰に近と他

の諸宗に勝れる所あり故に他の諸宗と異り大に信者の信仰を固め本山へ數千の信者が遠方より參詣する熱心の信仰は感るゝ餘あり余は幾度も之を見て嘆息し嗚呼斯程に信仰を持ち乍ら何故に眞の教を守らさるや若も彼等が眞の教を守り眞の信仰に移る時は社會の爲に廣大なる利益あり其身の爲め無限なる幸福あり進めよや〳〵今一歩を進めよやと獨言せし事も在り余は切に余が思を述て知ぬ人の譏を受る事も在る可し然ど天に對して耻る所は莫し本願寺の如き學術より進む本山に於て歐洲の宗

教を調る爲め數多の僧侶を各國に派遣し學術を研究せしむる中には基督教徒と交り深く眞理を探り眞理の根本を悟り得て世に來る都の人を照す所の光を受け純粹の心得を以て眞理を衆人に傳る爲め佛教の取る足ぬ因果を捨て回々教Mahometの國に於て目る見る如き開化を妨ぐる程に害の在る因果哲學の誤りを除き啻に眞理を説明し衆人を眞の教に立歸らしむる人なしとも云かたからん否なしと云ふ事は承知しかゝる明治十六年の春の頃より東本願寺の事務所に於て計らず屈指の僧侶に遇ひ此事

を物語りしよ如何なる心得にて聞かれしや知ず
然ど余い熱心に物語り事を記憶す余は廿餘年
以前日本へ渡り他の事よ就て之と同じ理を親
しく見さり即ち廿年以前維新の初に當り王政
復古の説が出て日本全國の人氣が一變し勤王
愛國の心得を以て身分に差支の在るも拘らず
破り難き昔時の習慣の在を論ぜず夥多の華
族士族が家祿を奉還し義を以て廢藩の美舉を
遂げ世界の万民を感服せしめさり同じ日本に
於て僧侶の中に眞理の説を出す者の在る時い

僧侶なからんや時節到來したらんよは僧侶の
中に眞理を認め眞理の説を出す者も在る可し
余は譏を受ろ事を憚ず切に思を述て之を祈る
余は日本へ渡り日本の兄弟姉妹の爲に命を捨
る程に至も天に對て懼れる所なし吾曾の先祖
なる日本の致命聖人即三百年前に基督の名よ
由て聖公會の証據人の如く殺されさる數多の
聖人の取次を以て此願を天に捧ぐ天の純粹の
信仰の爲に彼等は世界万國に於て日本の名を
顯し全く天主の正義黨なり眞の信仰の証據を
立て衆人の爲に眞の光を照し眞の信仰を求め

一めん事を謹で希ふ余は天に向て之を祈り婆羅門教論を捧げ人の之を讀む事を希ふ尤も行届さる所は不肖の余に對て許し給へ

日本聖公會の大主護たる聖人及足利末代の時なる卽ち三百年前に初て日本へ基督教を携へ來りしフランセスコ聖人 Francisco Xavier の祝日に當り

京都 明治廿一年十二月三日 ビリヨン

一千八百八十八年 A. Villion

婆羅門教論目錄

緒言 一丁

天竺古代の歷史略抄 廿一丁

卷之壹

婆羅門教の基督教及猶太教に相似る箇條 五十四丁

第一章 天主の事 五十五丁

第二章 三位一体の事 六十一丁

第三章 創世造物の事 六十三丁

第四章 樂園の事 七十五丁

第五章 偉人及壽命の事 七十六丁

第六章 洪水の事 七十八丁

第七章 カムの罪及罰の事 八十三丁

第八九章　婚姻の事　八十六丁
第十章　禁食誡戒の事　九十丁
第十一章　風浴の事　九十六丁
第十二章　寺院の事　九十九丁
第十三十四章　救世降世豫言の事　百〇二丁
第十五章　祭司の事　百十四丁
第十六十七章　山伏の事　百十五丁
第十八十九章　行者の事　百十六丁
第廿廿一章　祈願の事　百十七丁
第二十二章　世終の事　百十九丁
第廿三廿四章　天國地獄の事　百廿四丁

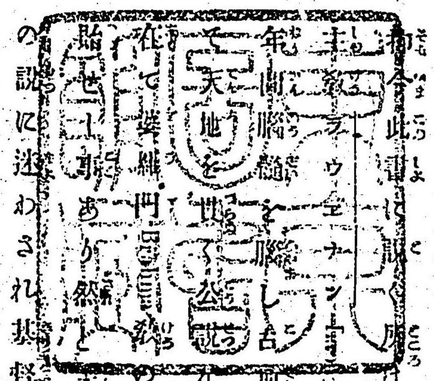
天竺國民と成りし各種土人の種族と宗教習慣の根本　百廿七丁
第一章　カム人種の事　百三十丁
第二章　トラニヤン及シナヤ人種の事　百廿四丁
第三章　阿利耶人種の事　百四十四丁
第四章　各種土人の宗教習慣の事　百五十七丁
惡魔の祭禮　百六十丁
人殺の祭禮
蛇の祭禮
生殖機の祭禮　百八十三丁
邪婬の惡習
安頻河の祭禮　百九十二丁
葬式　二百十七丁

卷之三

婚禮　二百廿五丁
婆羅門教の變遷　二百廿五丁
第一章　伏陀時代の婆羅門教　二百廿八丁
第二章　婆羅門教の哲學　二百五十五丁
僧企耶論派
倫伽論派
因明論派
鞞崄迦論派
佛婆秩娑論派
伏陀多論派
第三章　婆羅門教の律法　二百七十七丁

摩拏律法書中の地誌歷史
摩拏律法書中の經論
摩拏律法經論の變化
第四章　種族の權限　二百九十三丁
旅人の日記　三百廿一丁
第五章　釋迦出世及佛教破裂　三百六十五丁
天竺舊寺古跡の調査　三百九十七丁
大乘と小乘の分離　四百十丁
第六章　基督教と佛教の關係　四百廿六丁
支那に於て太宗皇帝の時代の天主教の碑頌　四百六十五丁

抑今此書ハ編者ノ管見憶測ニ非ス天竺駐在ノ公會主教ラウエナン氏ノ公ガ其國人民ノ迷ヲ破ル爲メ三十五年間腦髓ヲ腦シ古眞古跡ノ証據ヲ探リ漸ク調ベ拔タル者ニ天地ヲ世ニ公說ス



貽セル事アリ然ト在テ婆羅門Brahma教ノ基督教ニ倣ヒ修修ヲ列記シ參考ノ爲メ人竺ノ人民ハ婆羅門Brahma教創ト無神論者ノ說ニ迷ハサレ基督教ハ婆羅門Brahma教ノ說ヲ倒ミ組立タル人作教法ト思ヒ定メ固ク採テ動ス彼等ノ說ク所ヲ聞ニ入竺ハ世界無類ノ古國ニテ早ク文明ノ區域ニ達シ萬邦ニ冠タル上國ト成シ故ニ埃及人支那人希臘人如德人ノ如キ皆ナ者時天竺ニ來リ天文學地文學理學化學數學軍學なんど都テ有益

の業を修め各自本國に歸り廣く之を傳へて漸次に開化せし者なり看よ埃及の天文臺は天竺の天文臺なり支那の武器は天竺の武器なり希臘の哲學如德の神學みな天竺より流出せし者にて世界に有名なるサロモン Salomon の聖殿は天竺の聖殿の摸疑なりモイゼス Moyses の律法は天竺の律法の摸疑なり抔と頻に誇て止ず

明治十七年五月廿三日マドラス Madras に婆羅門教の大演說會あり此時辨士聰衆に向て道く我婆羅門 Brahma 教は古く天竺に基を開き漸次万國に蔓延して凡そ世界に宗教と稱する者は皆な我婆羅門 Brhama 教の摸疑ならざるはなし現今歐洲に勢力ある彼基督教の如き最も直接の摸疑にて之が原因を探り見に往昔エヂプト Egypt アッシリヤ Assyria 等の諸國が天竺と親密

の交際を爲し遂に我婆羅門教の聖書大戰 Mahabharata 書薄伽梵 Bhagavata 當爾那書なんどの說を採て舊約全書を編たる者なり是は架空の說に非ず確乎たる証據あり看よ舊約全書の樂園の說は我薄伽梵書に在り舊約全書の洪水の說は我富蘭那書に在り彼が基督と稱する者は我黑 Krishna 神にて彼が三位一体と稱する者は我婆羅賀、ウイシヌ、Vishnu 摩醯、シヴア Siva の三神一体の事なり云々

仝月廿七日仝地に於て又婆羅門教の大演說會あり此時の辨士は婆羅門教師の中に最も有名の學者なりしが數多の聰衆を足下に睨視し大聲に呼て道く諸君よ〳〵熟ら古代の景況を追想し昔曹祖先の尊ぶ可き事を知れ今を距る三千餘年の昔時羅馬建國以前世界の賢人と尊崇せられし如德の國王サ

ロモン其人が天主の聖殿を建築する時に當り我國の工人を撰で一切の工事を委ね聖書を編輯する時も亦た我國の學士を頼み之が指揮を受たり斯の如く工藝なり學術なり早く進で我國は古代より万國に冠たる者なり云々

天竺の人民は常に斯る説を多く聞て腦髄に充滿し一毛を容べき隙あらねば他に如何なる高論卓説を吐く者ありとも木に説き石に論ずる如く毫も感ずる色なし然ど主教ラウエナ叶公は斯る頑固の人民を教化するこそ吾曹が天主に對する勤なれ卒や眞理の光を以て彼輩の暗を照し迷の夢を覺させんと頻に肩間急操と雖も如何せん其國の言語も未だ充分ならず聖書を見も解し得ざれば理論を以て打消べき手術なく天を仰で嘆息し地に伏て血涙を呑み遂に忙然たる折から有

名なる彼ツイズマン Wiseman 教正の演説筆記を贈り來れる者あり抜て之を讀に宗教と學問の關係を詳く論じ天竺の聖書及天文學算術なんどは如何に古と云と雖も皆な妄説にて其實は新き者なり云々と在り此時ラウエナシ公は不覺に一大慎心を起し我此論説の後を接ぎ天竺の聖書は甸惑の時代より後に出來たる証據を探し婆羅門教は基督教の模疑なる事を明示せんとて丸より日夜其國の言語と文字を學び螢雪の勞を積で其國の人に異ならざる人と成しかば獨り自ら喜び今を距る三十五年前天竺の聖書を自國の言語に翻譯し尋で古跡の調に着手したるが此頃英國の學士ジョンス Jones 氏ユルブロック Colebrook 氏ウイルソン Wilson 氏ベントレ Bentley 氏ウイルフォルド Wilford 氏など來て天竺の聖書を英國の言語に翻譯せ

んと欲し、專ら力を盡す最中なりし

主教ラウエナシ公は天主の光榮を顯す爲め自己の艱苦を顧

ず身に一点の汚衣を纏ひ東はビルマ Birmah 地方より西はマラ

バル Malabar 海岸まで南は錫蘭 Ceylon 島より北は雪山 Himalaya 山迄

を殆ど天竺全國を巡回し婆羅門教の根本たる恒河 Ganges 河の

邊を初め天竺の歴史に高名なるアグラ Agra 府の古戰場また

摩度羅府に Mathura 在る黑神の皇居など有もる古跡を殘らず

調べ進で佛教の根本たる摩伽陀 Magadha 地方に入り釋迦の古

跡を調べ揭て心に納め夫より古典の調に係り伏陀 Veda 書佐

多羅 Sutra 書摩拏 Manu 書富蘭那 Purana 書なんどの法律歴史

と初め都て古身に關係ある書籍を悉く讀み盡し尙は充分証

據を揭る爲め英國の學士が天竺の古跡に就て意見を述たる

書まで殘らず讀み終り三十五年間一日の如く不撓不屈の精

神を以て刻苦勉勵ありし功驗あらはれ遂に婆羅門教は漸次

變化して今の婆羅門教に非ず初の變化が每

瑟の時代より遙か後に在り終の變化は特に新く基督教の天

竺に傳播せし後なる証據を數多見當に至れり

元來婆羅門教は自己の信仰と規律を維持する事あたはず他

國より天竺へ移住せし人民の習慣を採て己が教法の中へ組

入だん〳〵變化したる者にて今其二三を云ばダヂユ Dasyus 藩

人の習慣を採て牲の式を定めカミタ Ghamites 藩人の習慣を

採て鬼を拜み天竺土人の習慣を採て不潔の女神を磨醯濕伐

羅 Siva 神の妻として拜みし者なり三神一体の說黑 Krishna 神の

說また樂園洪水の說なんどは皆な天竺へ移住せし如德亞人

の説を採たる者にて是は、三位一体の天主を天地万物の造者主宰と認め樂園の福祉洪水の義罰基督の救贖其他眞理に適する事のみなれば遂に之を以て婆羅門教の奥義としたるなり

斯く説き來て今婆羅門教は基督教の模疑なりと斷言せんと欲するに當り且づ天竺各藩の根元と年代を調べ參考に供ざるべからず然ど天竺の歴史は年號なくして年代を明示する能はず彼ウイスヌプラナ Vishnupurana 書の如き最も有名なる歴史學者の著述なれば摩伽陀國に血統の異る八の王族あり て寔に混雜なる時代の景況を目に見る如く綿密に記載したれど一も年號を來たる所なし故に止を得ず他國の歴史より天竺に關係ある箇條を引て天竺の歴史に照し之を証據に年

代を定るの外なし例て云ば希臘の歴史に基督降生以前三百六年より二百九十八年の項アレキサンドル Alexander 王が天竺を征伐し印度のサンドラコトス Sandrakottus と云ふ人に面會す其後サンドラコトスは摩伽陀國の王と成りアレキサンドル王の將セルックス Seleucus 公はメガステノ Megasthenes 氏を公使として印度に遣りしが彼は數年波陀梨那 Pataliputra 則ち今のパトナ Patna 府に止る云々と在を以て天竺の歴史を調べ見に摩伽陀國王謎月 Chandragupta の事に當る故に謎月は基督降生以前三百二十年より二百九十年の項に在し人と推斷するの類なり既に一の証據を得たる上にが他の年代を調る事は甚だ易し譬ば釋迦の年代を調んと欲する時は釋迦の履歴を試み其中頻毘婆羅 Bimbisara 王阿闍多設咄路 Ajatasatru 王の兩個が釋迦の説法

を聞て佛教を信じ云々と在る所に至り釋迦は且此両王時代の人と知り偖此両王の事は有名なる歴史ウイヒイヌプジナ書を見て知る則ちウイヒイヌプラナ Vishnu Purana 書にシエシヤナガ Sushanaga と云ふ血統の王の系圖を揭ゲ其中に此両王の名あり而て此血統の王が三百六十二年續き其後難陀 Nanda と云ふ血統の王が百年續き其次にモリヤ Mauriya と云ふ血統の王が起る云々と在り彼護月王はモリヤと云ふ血統の王の初にして之を前の証據に依り基督降生以前三百二十年の頃と見る時は頻毘婆羅王は基督降生以前六百年内外の人と知り釋迦の死去は頻毘婆羅王の後を續し阿闍多設咄路王の即位八年と在を以て基督降生以前大略五百九十年の頃と知に至る世界の學者が種々の証據を揭て釋迦の死去は基督降生以前五

百四十三年なりと云ふ何にしても釋迦は基督以前六世紀の中央か其末に死たる者なり

斯る順序を以て綿密に調べ揭る時は婆羅門教の根元なる聖書讃誦、伏陀 Rig Veda の如き者は何悉の時代より遙か後に出來たる者にて全く基督教の聖書の模擬なる事を知に至る如何とあれば讃誦、伏陀の中に數回ベナレス Benares 國リチダザ王の名を揭げ其子二人が聖書の幾分を認めたりと明かに記し又婆羅門教の歴史の中にリチダザ Divodasa 王が釋迦の説法を愼で聞し事を載たり然れば讃誦、伏陀はリチダザ王の時代より後に出來たる者にてリチダザ王は釋迦の時代の人なる事を知る而て釋迦は基督降生以前六世記に死たる証據あり之を基督降生以前十四世記なる何悉の時代に比すれば八百年の後なれ

ばなり啻に讃誦伏陀のみならず都て婆羅門教の聖書は基督教の聖書より數年の後に出來たる者にて彼監摩耶那Ramyana書なんども寔に新き者なり此書は則ち監摩耶那王の歴履なるが初め空羅筏悉底Sravasti國鉢羅厚那特多Prasenajit王が釋迦の說法を聞て佛教を信じ其後此王リヌカRanka姫を生みリヌカ姫監摩耶那王を生と在り然れば此書は釋迦の死後數年を經て出來たる者にて基督降生以前五百年の頃なるべし其他一切婆羅門教の聖書の出來たる年代を明示する事は最も易き業なれど今此二三の例わ挙て讀者は既に他を推知せられしなちん故に之を省き茲に大聲を發て婆羅門教の聖書は基督教の聖書の摸擬なりと斷言す

凡例

書約の賢書Sapiantin十三章十四章に曰く天主の智を知ざる者は寔し如何となれば被造たる有形の万物を見ながら造者なる無形の天主を知ざる者なればなり併し彼等の察を以て日輪風空氣星月水なんどを神と思ひ刑む者は他の人より罪が輕し如何となれば天主を探と雖も眞の天主を認め得ずして斯る物の美なるに欺むされ神と思ひ誤りし者なれば人間の手に被造たる異形の金銀また木石の偶像なんどを刑む者は寔に空く憐なる者なり如何となれば職人が大木を伐り能き所は他の用に充て殘の屑は己が食を炊く爲め剩と爲一何も用を爲ぬ根の所を採て像を刻み赤き色を塗て傷を陰し一樹の上に置と雖も彼は自ち身を保つ能わたはずして轉

異今為可笑

び落る者なれば釘を打て留たり此死たる者に命を求め此空き者に助を請ひ此歩ざる者に旅の安を願ひ此働ざる者に商買の事を祈る者なればなり偶像は邪婬の原なり騒亂の根なり偶像は人間の驕奢と愚痴に出て世に顕る譬て云ば我子の不意に死たる親が悲歎の餘り其子の像を造り之に物を供て神の如く拜み年を經て此事が習慣と爲り遂に慣制なる權者の誤に出り規則の如く成て像を室に飾り他人に拜ます者あり或は銘作の偶像に感服して拜む者あり或は生たる時に敬はれし人の像を造り之を拜む者も在り此等の迷は人間の愛情に引れ又は國王に從ふ爲め天主を忘却たるより起りし者にて他の物に用べからざる神と云ふ名を木や石に與へ漸次に愚痴なる人と爲て禍災を惠と思ひ偽の神に對し愛す可き

子を殺す者あり或は酒に溺れ色に耽り或は人を殺し財を奪ひ世は悪く亂れ啼殺偸盗欺偽を勧め不義の街と成り子を生する自然の定規を破り奸淫離縁の罪に陥る是れ偶像を拜む結果にして偶像は悪の根原なり云々

斯の如く聖ソロモン Sibomon 王が天主の默啓に由り偶像敬の愚痴なる根原と迷惑なる結果を僧約の賢曾に認め以て世の誡と爲す是れ則ち婆羅門教に符合せり婆羅門教は初め無上至尊なる一体の天主に對する信仰を誤り天主の働を万物の働と思ひ万物皆神と云ふ辟論を立阿者尼 Agni(風)跋私 Vayu(空氣)因陀羅 Ludra(星)婆樓那 Varuna(日輪)蘇利耶 Suriya(月)旃達 Tchandra(雲海山川)なんどを拜み進で偶像を拜ひ事と爲り遂に禽獸木石を拜むに至れり斯る迷の淵に沈むひの爭で安を得ん漸次情慾の

実に教はれ眞理の光を失ひ醜惡の行ひ多く陰に陽に不潔の偽神を拜し自ら風俗を亂す寔に憐むべき事ならずや抑も初め一神教なりし婆羅門教を多神教と爲し之に穢を加し者は誰ぞ蓋は昔時天竺へ移住したる各藩の土人と我慢なる婆羅門教師なり天竺の歴史を讀に阿利耶Aryasと云ふ婆羅門教の藩人が中亞細亞を出恒河Ganges河の邊に移り伏陀Vedh及び其他の聖書を未だ編制せざる前すでに數多の他藩土人天竺に移住し各自く宗教と稱する者ありて已が隨意拜禮を爲し居たり婆羅門教師これを見て彼等を我教に引入なば我は一層勢力を得ならんと思ひ百端の工夫を以て誘引すれど彼等なか〳〵服從せざれば止を得ず彼等の習慣を婆羅門教の中に組入たる証據數端あり

釋迦婆羅門教を改良して佛教を立る以前婆羅門教師は他國より移住せる人民の習慣を採て悉皆婆羅門教に加へ佛教の盛大に成し後は猶其人望を求る爲め之を行り故に婆羅門教は漸く次變化し今の婆羅門教の基礎たる聖書は天竺へ移住せし猶太國人の習慣より採たる者にて全く基督教の聖書の摸擬なれど世上論者の說が兩に分れ一は婆羅門教の古跡が甸惑の時代より新き証據を以て婆羅門教の聖書は基督教の聖書の摸擬なりと云ひ一は天竺の國が甸惑の時代より古き証據を以て基督教の聖書は婆羅門教の聖書の摸擬なりと云ふ然ど是は皆な靴を隔て痒を搔が如き証據とて充分ならず故に今ラウエナシ Lauenhan 公が三十五年間の辛苦より得たる結果を茲に提出て確乎たる証據を揭て婆羅門教の聖書は基

督教の聖書の摸擬なる事を明瞭ならしむる爲め全部四卷の書を編み左の順序に依て開陳す讀者よ〳〵讀者は一方に偏せず公平無私の心を以て判決あらん事を希ふ

第一婆羅門教の基督教及猶太教に似たる箇條を擧ぐ第二天竺に住む人類を調べ各藩土人の習慣を擧げ阿利耶 Ariya と云ふ婆羅門教の藩人が天竺へ入ざる前の景況また入て後婆羅門教師が彼等と交際する摸樣を說く

第三婆羅門教の變化を示す婆羅門教の徒が迷て醜惡を爲す古今の形容を述べ次に今の婆羅門教は每惡の時代より遙か後に出來たる者にて其中基督の時代より後に出來たる箇條も多き証據を揚げ之を固る爲め古跡の調を附し婆羅門教の寺に土中より堀出たる者など在ども大体千年以内の者にて

是は書紀元前四百年代は天竺が波剌斯 Persia に屬し紀元前三百年代に蜀ヒルセスと云ふ王の支配を受と在に符合する者にて歷山大王が波剌斯を亡たる時まで天竺は波剌斯に屬し歷山大王が波剌斯の軍中に天竺の兵が多ゴラニックGranique の戰爭に於も波剌斯の軍中に天竺の兵が多く在し

歷山大王の天竺征伐は天竺の古跡を調る便と成たる者にて王は自ら之を調べ海軍卿オニシキリット Onesicrito 祕書官カリスン Callisthene 波吒梨耶 Pataliputra の說月 Chandragupta と云ふ王の側に在し希臘の全權公使メガステス Megasthenes 等の諸氏に命て細に記し賫羅馬の諸學士が自ら筆を採て寫せし事あり紀元前五十年代にスタラボン Strabon と云ふ地理學者の寫る者と紀元時代にプリイヤ Plin と云ふ動物學者の寫る者は今尙存在す

紀元後百年代にアリエン Arrien と云ふ學士が印度征伐記と云ふ書を著し其中に印度人の七種族を詳に記し種族の異る者と結婚を禁じ皆な自族の習慣を堅く守る事を述べ紀元前三百年代に組織し印度社會の規則に能く似る事を示せり

アリストブル Aristobule 氏は竺刹尸羅 Taxila 領の風俗を調べ夫を失る妻は夫の屍を焼く火の中へ自ら身を投じ死と云り是はサッチ Satti と稱る儀式の事を述たる者にて今尚此事を實施する者あり

ヲニシクリット氏は歴山大王の命を受て印度へ渡り仙人に從ひ哲學を研究し破羅門師が命を顧ず樂躰に成り行を爲る容を見て理由を質し是は希臘のピタゴール Pythagore 及ソクラテス Socrate の教に等と云ひ又メガステ氏は印度に於て仙人の

千五百年より古き寺は一も認め得ざる事を說く

第四天竺の習慣が猶太國人基督教人に似たる事を論じ歴史の大畧を揚て天竺の人民が聖サロモン Salomon 王の時代より基督の時代まで猶太人へブレヲ Hebreo 人と親密の交際を爲し基督降生以後トマス Thomas 宗徒の項より彼フランセスコ Francisco 聖人の頃まで則ち日本足利將軍の末の時代まで他國の基督教人と交り際かりし事を陳ぶ

督教の聖書の摸擬なる事を明瞭ならしむる爲め全部四卷の書を編み左の順序に依て開陳す讀者よ〳〵讀者は一方に偏せず公平無私の心を以て判決あらん事を希ふ

第一婆羅門教の基督教及猶太教に似たる箇條を擧ぐ第二天竺に住む人類を調べ各藩土人の習慣を擧げ阿利耶 Ariyas と云ふ婆羅門教の藩人が天竺へ入ざる前の景況また入て後婆羅門教師が彼等と交際する摸樣を說く

第三婆羅門教の變化を示し婆羅門教の徒が迷て醜惡を爲す古今の形容を述べ次に今の婆羅門教は每惡の時代より逃かに出來たる者にて其中基督の時代より後に出來たる箇條も多き証據を揚げ之を固る爲め古跡の調を附し婆羅門教の寺に土中より堀出たる者など在ども大体千年以内の者にて

千五百年より古き寺は一も認め得ざる事を說く

第四天竺の習慣が猶太國人基督教人に似たる事を論じ歷史の大畧を揚て天竺の人民が聖サロモンSalomon王の時代より基督の時代まで猶太人ヘブレヲHebreo人と親密の交際を爲し基督降生以後トマスThomas宗徒の項より彼フランセスコFrancisco聖人の頃まで則ち日本足利將軍の末の時代まで他國の基督聖人と交り深かりし事を陳ぶ

天竺古代の歴史略抄

天竺古代の景況を知んと欲する者は天竺古代の歴史地圖日傳に依ざるべからず故に今其順序を定ゑ爲め卿が之を述んサビエレモン Xavier Raymond と云ふ學士は曾て天竺古代の景況を調査し大に驚て曰く野蠻未開の國と雖も古代の景況を說明し歴史の基礎と成る可き舊跡と口傳は必ず在て存する者なり夙に文學と技藝を以て名の響く天竺は獨り之を存する事なく唯其年記に推察の妄臆を認たる耳にて探べき者なし故る天竺の歴史は紀元前三百廿七年に希臘歴山大 Alexander 王が天竺を征伐せし時より前に遡る事を得ずと云へり是は此人一人に非ず天竺研究學者は都て之を同じ說を爲す尤も天竺の古き寫本を探し見に紀元前千年代の者は絶て莫し且

つ古き寫本と雖も漸次に增補修正し最後の筆は晩近に及べる者なり依て止を得ず舊希臘及羅馬の正き歷史に天竺と關係の在る所を探し諸學士の說を揭ぐ左の如し尤も古へ支那に於て梵語を譯せし地理學の譯字を見當儘に古跡の便として之を加たり

天竺古代の景況を初て調べし舊希臘のヘロドトHerodoteと云ふ歷史家の說に依れば天竺は波剌斯Persiaのダリース Darius と云ふ王が支配し住民の多き其屬國中の第一に位し何年五百万圓の貢を納め曾てダリースがシラクスSyrax と云ふ海軍の大將を送り信度多Hindustan の河岸に在る平地を調たる事あり又た波剌斯のピルセスXerces と云ふ王も天竺を支配し王が希臘を攻し時は木綿の衣服を着し天竺の軍勢が多く出て王に從ひ行り

是は書約エスラル Esther 書に紀元前四百年代は天竺が波剌斯の支配を受と在に符合する者にて蜀ーゼルセスと云ふ王の時まで天竺は波剌斯に屬し

にて歴山大王が波剌斯を亡たる時まで天竺は波剌斯に屬し

ゴラニック Granique の戰爭に於も波剌斯の軍中に天竺の兵が多く在し

歴山大王の天竺征伐は天竺の古跡を調る便と成たる者にて王は自ら之を調べ海軍卿オニシキリット Onesicrito 稅書官カリスン Callisthene 波吒梨那 Palibothra の設月 Chandragupta と云ふ王の側に在し希臘の全權公使メガステス Megasthenes 等の諸氏に命て細に記し奮羅馬の諸學士が自ら筆を採て寫せし事あり紀元前五十年代にスタラボン Strabon と云ふ地理學者の寫る者と紀元時代にプリイヌ Pline と云ふ動物學者の寫る者は今尚存在す

紀元後百年代にアリエン Arrien と云ふ學士が印度征伐記と云ふ書を著し其中に印度人の七種族を詳に記し種族の異る者と結婚を禁じ皆な自族の習慣を堅く守る事を述べ紀元前三百年代に組織し印度社會の規則に能く似る事を示せり

アリストブル Aristobulo 氏は竺剎尸羅 Taxila 領の風俗を調べ夫を失る妻は夫の屍を焼く火の中へ自ら身を投じ死と云へり是はサッチ Satti と稱る儀式の事を述たる者にて今尚此事を實施する者あり

ヲ・ニシキリット氏は歴山大王の命を受て印度へ渡り仙人に從ひ哲學を研究し破羅門師が命を顧ず裸躰に成り行を爲る容を見て理由を質し是は希臘のピタゴール Pythagoro 及ソクラテス Socrato の教に等と云ひ又メガステ氏は印度に於て仙人の

記を細に記し破羅門師の外にガルヤチス Garmanas と云ふ仙人の在る事を述べ之は破羅門師の次に位する僧にて別の名を含羅摩拏 Sramanas と稱し數は最も多く在と云り

ストラボン Strabon 氏の地理書を見に大夏國 Arabia の海岸より天竺まで各地に貿易を爲ーエチヲピヤ Ethiopia のシエチ Syene と云ふ港に於て一時に百餘艘の貿易船を見と在り又プリヌ Pline 氏の地理書に天竺、と埃及の貿易を詳く記し羅馬帝國へ天竺より輸出する物品の代價は毎年貳千万圓の多に至と在り

天竺と歐州諸國の貿易は斯の如く盛に行れ双方の人民相互に交通せし者なりストラボン氏の歴史に天竺のポールス Porus と云ふ王が其國の物産を携へ紀元前廿四年に羅馬帝國へ渡りオーグスト Auguste 帝に見へシクロード Claude 帝の時代に錫蘭

Ceylan島より使節を羅馬帝國へ送りトラジヤン Trajan帝の時代に天竺人が多く歐州諸國へ移住す尤も紀元後三百年代のアルシフロン Alciphronの書翰に在る如く舊希臘の時代より繼續せる奴隷の天竺人も多く住ならんと在り又プリヌ氏の歷史第二卷にゼルマニヤ Germaniaの海に於て紀元前五十七年に天竺人の乘組し破船を認め土人が之を助てゴール Gaulesのマルセルセール Marcellus Celerと云ふ領事の許へ送し事を載せ且チレリヤン Aurelian帝がアラビヤの沙漠に於てゼノビヤ Zenobia女帝を虜と爲しパルミール Palmyreの城を取し時に多く天竺人の兵卒を捕へ羅馬府へ送し事を記せり

天竺の摩提囲 Maduraが府ワイガイ Vaigay河を初め其他各地の土中に舊羅馬の古器物が埋り在と認め特に河の沙礫中より舊羅

馬の銅貨を堀出す事の在は昔時貿易の盛なりし時に舊羅馬の商人が此地に住し事を記するに足べき者なり

天竺と歐州諸國は啻に物産を貿易したる耳ならず文學技藝を交換し歐州諸國の博士學士が多く天竺へ渡り己が文學技藝を傳へ十二宗徒の中に天竺へ渡り基督の教を傳し人も在て基督の光は天竺を照し天竺人は性教を知のみならず舊約全書の儀式と新約全書の教示を知の便を有し日本西教史に詳く記し在る如く日本が昔時葡萄牙國と交際し葡萄牙國人の便に依り聖フランセスコザベリヨ Francisco Xaviroが天文十八年に遠く日本へ渡り基督の教を傳へ日に月に盛なりしが一朝颱風吹來て之を遮り三百有餘年間の久き歷制を以て偽道を嚴禁せられ漸く天の惠に依り安政年中外國交際の道が

再び開け示來廿年を經て基督の光を受し如く天竺も外國交際の便に依り昔時は基督の光を受たる者なり

天竺の舊地理學

舊希臘國歷山大王の命に依り紀元前三百廿年に天竺へ渡し

エラトステヌス Eratosthenes 氏ストラボン Strabo 氏の調に依ば天竺の地は細馬き斜方形狀を爲し西北は信度の河流を以て限り東北は雪山 Himalaya の山嶽を以て限り恒河 Ganges の河口よりコモリン Comorin の岬に至りコモリンの岬より信度 Indus の河流に至る

同じ時代に波吒梨那 Palibothra 國護月 Chandragupta 王に見る爲め天竺へ行ーメガステスと云ふ人も是と同じ說を爲す波吒梨那は今パトナ Patna 府と云ひ護月は希臘語にサンドロコッス Sandrocottus と云ふ尤もメガステンと云ふ人は希臘人なり

大戰 Mahabharata 書に就て紀元前百年の調を見る天竺は三角形を爲しアフガニスタン Afghanistan より雪山山に至り轉て婆羅吸摩補羅 Brahmaputra に至る而て三角の頂上はコモリン岬なり

瑟伽部 Parasara Tantra 書に就て紀元後六百年の調を見に天竺は九州に分裂し恰も遺華の如し富蘭那 Puranas 書も是と同じ調を揚げ百端の說を附たり

ウイシヌ富闌那 Vishnu Purana 書に就て紀元後七百年の調を見に天竺を東西南北中の五部に分ち明細の地圖を製し一目瞭然たらしむ今其大要を述ぶ左の如し

第一部　北天竺

北天竺は迦畢試 Cupisene 迦濕彌羅 Kasmira 七信度 Sipta Sindhu の三に分

れを北天竺の三州と云ひ特にカビゼン州を北方天竺と稱し夥多の城市村落を有す

第一項　迦畢試州

迦畢試州は信度 Indus 河とコウカズ Caucase 山の間に在て今は之をアフガニスタンと云ふ全州を十區に細別し其中著名の地は迦畢試 Capisa コペス Copene 濼稚 Balti ランバヂ Laubagae 那揭羅喝羅 Nagasalara 乾陀羅 Gandara 等なり

迦畢試は一にコウカス山のアレキサンドリヤ Alexandria 城と稱じ今のカリカル Charikar 府なり

コペスは古く讚誦伏陀 Rig Veda に名が顯れ傳埃及國の地理學者ポトレメチ Ptolemeo 氏は之を高附 Cabura と云ひ舊羅馬國の地理學者ストラボン Strabon 氏は之をオルトスパナ Ortospana と云り

尤も梵字 Sanscrit の書に斯く云る所も多くあり亦たアレキサンドルの歷史に多く此名を用ふ是は今の高附 Cabul 國なり

濼稚 Balti は今の小地藏國に當り有名なる高山あり之を須彌山 Meru と稱す佛說の須彌山は是より出たる者なり

ランバヂ Laubagae は梵字の書に溫波 Laupaka と在り則ち今のランガン Langhan 府なり

那揭羅喝羅 Nagasahara は一にウヨニゾポリス Dionysopolis と稱しポトレメチ氏の調に依ば今のゼラヽバ Jellalabad 府なり

乾陀羅 Gandara は一にエンボリナ Embolina と稱しストラボン Strabon 氏の調に依は今のチヒント府なり此他に歷山大王が天竺へ侵入し初て取しバラザ、バラ Parashawara 城あり今は之をペシヤワル Pashawar と稱す

第二項　迦濕彌羅 Kashmira 州

迦濕彌羅州は雪山山の南に在て全州を三領に分ち呼て迦濕彌羅領烏剌尸 Urasa 領曷羅闍補羅 Rajapura 領と云ふ

迦濕彌羅領は舊希臘國の地理學者がカスペイレス Caspires と云し土地にて有名なる二城あり一を羯蠅揭羅 KhagendraPura の城と云ひ一をクナムシヤ Khunamusha の城と云ひ何も阿育王の時代に築たる者にて佛教の歴史にも記載せり

烏剌尸 Urasa 領は希埃及國の地理學者がアビサン Abissare と呼たる地にてアレキサンドル Alexandre の歴史にも記載せり

第三項　七信度州

七信度 Saptasindhu 州は七河の領地てふ意味にて梵字 Sanscrit の書に古く名が顯れ闍賓 Khubi 河信度 Sindhu 河を初め都て七條の大河を有し今は闍賓河を高附 Cabul 河と云ひ信度河をインダス Indus 河と云ふ其他の五河も古今名稱を異にす爲り

七信度 Saptasindhu はタキ Taki 領と云ひ赭褐 Takas と云ひ僧伽 Sakas と云ふ是は佛説に所謂那伽 Nagas 人より出たる名にて那伽人はシチヤ Scythia の習慣を墨守し蛇を拜する者なり斯る人種の天竺へ初て入り時代を調べ見に紀元前六百年の頃に在り而て此那伽人の住む地を其頃パンジャブ Panjab 領地と云り是れ則ち七河の領地てふ意味なり

七信度を三領に分ち名て契吒 Kathi 領軍荼羅 Sudraki 領利末 Malli 領と云ふ

契吒領を今はカチス Kattis と云ふ歴山大王の攻取し窘褐羅の Pugala の城は此地に在り是は婆羅門教及佛教の歴史に載て詳

又た別にシナパチ Chinapatti とふ城あり今はパッチ Patti と云ふ此城の近傍に紀元後百年代より支那人が多く住む

輪達羅 Sudras 領は舊希臘及舊羅馬の地理學者が明記する所にて歴山大王が撃破しコッカマリヤ Kokkumalia の城は此地に在り

則ち歴山大王が盛熱 Zradrus 則ち今のインヂウス河岸より進撃する事を止て是より希臘に返し所なり

末利 Malli 領は舊希臘國の歴史にアリイと記せる所にて此地にムルタン Multan とふ城あり歴山大王が攻撃し重傷を受たる所なり尤もヘロドット Herodoto 氏ポトレメヲ Ptolemeo 氏は別の名を用ふ又た婆羅門教徒が棺籠て歴山大王の鋒先を避し阿吒利 Atari の城も此地に在り此等の事實は舊希臘國の歴史に詳

第二部　西天竺

西天竺は信度 Sindhu ペルシスタン Baluchistan 罽折羅 Gurjira カンベ Cambay の總稱なるが細別すれば信度大夏 Arabi 契吒 Catch 罽折羅 蘇剌吒 Surashtra の五部と爲る

第一項　信度の領地

ツグジヤ Sogdia 領は舊希臘國の歴史に名が顯る則ち歴山大王が域を築きアレキサンドリヤ Alexandria と云ふ名を附たる所にて全く今のファジプール Fazilpur なり其中にムヂカ Musica、パタラ Patala の二領あり

ムヂカ領はポトレメヲ氏の波吒羅 Alor と稱する所にて信度河の東に在り婆羅門師が爲て此地に市街を設け遂に一大都會と成し婆羅門國婆 Brahmanadabal と名け繁昌一方なりしが一

且は歴山大王に奉はれ其後内亂の爲に潰されたり

波吒燈領は信度河口に在り歴山大王が軍を收め本國波利斯Pataliへ歸る時に當り船に乘ーバルバリケ Barbariko の港が此地に在て今は迦羅那の港と云ふ

第二項　大夏の領地

大夏Arabii領は大夏と云ふ河の名に依て附たる名なり詳き譯はポトレメヲ氏の書に在り

チリテ Oritae 領は歴山大王の命に依て附たる名なり尤も此地の都會は歴山大王の命に依て設たる街なり

第三項　契吒半島

契吒Catchは半島にて信度Indus河口の南に在り雷鄙馬國の地理學者プリノ Plino 氏の著書にも明記せり此地の都會は今も昔も

も斐薩恒那Khotiswara と云ふ

第四項　斐折羅領地

斐折羅Gurjara は梵字の書に蘇剌吒Surashtra と記し在りポトレメヲ氏の著書にも明記せり今はグザラットGujarat と云ふ紀元後七百年代に波羅者Pallavas の王が此地にエラプーラElapura と云ふ城を築き中に美麗を極し殿堂を設けリンガLinga と云ふ姪神の偶像を安置す然に紀元後一千年代に至り回々教徒が勇を振て侵入ーヤヌドMahmoud と云ふ回々教徒の猛將が兵卒に命て殿堂を毀ち姪神の偶像を置さーめたり

第五項　蘇剌吒領地

蘇剌吒はグザラットの南に在り今はスラトSurata と云ふ此地は昔時蘇剌吒人の住し地なり

舊希臘國の學士と梵字の學士が一大都會と云ーバリカサBaryaza を今はバロット Bharoteh と稱す

舊羅馬國の地理學者プリノ氏がワダリ Vadari と云し地は今尚其名を存し此地に昔時歡喜國 Abhira 蕃人が住て金銀を堀採し

アラワリ Aravali 山を今はアブ Abu 山と云ふ

舊約全書に此地をチヒール Ophir と記し舊猶太國の地理學士はソヒール Sophir と云り聖サロモン Salomon 王が聖殿を建る時に當り金銀を求る爲め船を送しナヒールは此地にて其項より

ソービラ Sauviras 蕃人の住所なりプリノ氏の說に依れば此地は金銀の礦山に富て昔時より有名なる地なり今猶礦山は多く在り

第三部　中天竺

中天竺は北雪山 Himalaya 山より南尼底 Vindhya 山まで續き婆羅門數の書に婆羅門國 Brahmavarta と稱し塵奴律法に中國 Madhya Desa と稱する地なり此中天竺の地理を明瞭に揭る事は此書の編纂に就て肝要の点と爲す今中天竺の地誌地圖を研究し釋迦の來歷を詳に知の便と爲る者は英國の文部卿が數多の學士を派遣し數十年間に調揚たる事跡にて佛教の徒が如何に釋迦在世の景況を細に說と雖も是より密なる者なし

第一項　婆羅門國領地

此地は婆羅門師宗族の地と云ひ天竺に於て數多の人民が大に尊崇する聖地なり地勢は室羅筏悉底 Saraswati の河岸に沿て廣く田土膏沃にて作物豊饒なり故に大戰 Mahabharata と云ふ書に所る地に住む者の快樂は地堂に住む者の快樂に等と云り

尤も今はサヲスウアナ Sakisrabi の河を者利富多羅 Sareuti の河と呼ぶ

此地の都會は薩他泥濕伐羅 Sthaneswara と稱す舊埃及國のポトレメチ Ptolemeo 氏は之を婆檀 Batan と云ひ今はタチサール Thanesar と云ふ

婆羅門師の爲に非常の尊崇を受し回陀羅波羅多 Indra pristha と稱する街あり昔より繁昌し今は之をデリ府と稱す

第二項　婆羅門志 Bramarshi 飢地

摩拏律法を見に婆羅門志は六個の小國を合併せし者にて今尚六個の名を有し摩度羅 Mathura 摩頭滋 Mahesn 蔓多羅 Mandala 末底富羅 Madipura 跋私底夜 Vatsiya 阿提沙多落 Adichhatra 僧脚崎 Sangkasiya の六個に區別す

摩度羅 Mathuna は閻牟那 Yamuna の海岸に在り舊羅馬國の學士プリヌス氏は閻牟那の河をジョマチス Jomanes の河と呼び此地の形勢を述たり

摩頭滋蔓多羅 Mahesn は佛書に阿育王が城を築き曼陀羅 Mandala の城と名し所と在り是は紀元前三百年代の事なり

末底富羅は雪山 Himalaya 山中より湧出する水が集り恒河 Ganges の河と成る土地にて有名なる城下あり之を競伽河門 Gangadwara と云ふ天竺の人は都て此地を神聖の地と稱し常に參詣す

跋私底夜は婆薩美 Kosambi と云ふ城を有し寶樹を以て釋迦の像を安置す此像は紀元前五百年代釋迦在世中に弗少烏陀愆那 Vatsa Udayana 王の命に依り刻る者なり

阿醯學恒羅 Adichhatra は舊埃及國の地理學者ポトレメチ氏の譯

く説る地にて名ある城下なり

曾御眠 Sangkasya は今のサンキシヤ Sang Kisa と稱する地にて佛説に釋迦出世の時因陀羅 Indra 神婆羅賀磨神が此地に顯れ釋迦を拜み其他の諸神も釋迦を拜む爲め此地に來と在り

第三項　中國 Madyadsa 領地

中國は夥多の小國を合せし者にて尤も古く名の有る地を薩羅 Kosala と云ふ是は藍摩耶那 Ramayana 書にサラユ Sarayu 河の領地と云ひ今はサラヂユ Sarju と稱す其他阿踰陀 Ayodhiya 城室羅筏悉底 Iravasti 城却比羅伐窣覩 Kapila Vastu 城藍摩 Ramagrama 城畢鉢羅 Pipalavana 城波剌那斯 Kasi 國摩伽陀 Magadha 國伽耶 Buddha Gaya 街毘舍羯羅補羅 Kusanagardura 街賓波羅窪 Vallaya 山那爛陀 Nalanda 院チリサ Orissa 領地など有名なる所なり

阿踰陀城はラマサンドラ Ramachandra 王の建たる城にて此王は釋迦の時代に生存し鉢羅犀那特多 Prasenadjit 王は之が十四代の孫なり藍摩耶那 Ramayana 書の説に依ば此地は全天竺中第一繁昌なる地にて釋迦は此地に六年の星霜を經たり

室羅筏悉底 Irasvati 城は鉢羅犀那特多王の曾祖父王が築たる城にて紀元前百年代に此王が佛教の徒を責たる事あり

却比羅伐窣覩 Kapilavastu 城は阿踰陀 Ayodhiya 城の東俱迦利 Kohana 河の岸に在り今はナガルカス Magarkhas と稱す是は釋迦の古郷にて釋迦の母摩耶天女 Maya Devi は此城を距る四里の地に在るコリ Koli 城の王の娘なり摩耶天女が釋迦を産し地は却比羅伐窣覩城とコリ城の間に在る別莊にて之を風里尼 Lumbini の別莊と云ふ而て此地に住ひ者は今に曷羅闍羅 Rajaka 剎恒利耶

Kshatriya人と僧答摩Gautama族の子孫と稱し權を振ひ威を示す此僧答摩族と云は釋迦の種族なり

藍摩Ramagrama城は僧薩羅Kosala領に在る釋迦の獨懺を分ち來て納たる所なり今はデオカリDeokaliと稱す此地にオーミAumi河あり佛説に依ば釋迦が未だ薩婆悉達陀Siddharta太子たりし時に父の住居を脱走し馬に乘て一飛に飛越たる大河なり

畢鉢羅波那Pipalavana城は一大林中に在て今は勘忍界Sahankat と稱す是は釋迦の死體を燒し灰を埋たる所にて俗に死跡城と云ひ佛教の古刹あり

香至Kasi國は舊埃及國の地理學者ホトレメチ氏の小説にカシダKassida國と稱し波剌那斯Varanasi の城下に在と云ふ波剌那斯の城下はペナレスBanarsの貴き城下と稱し釋迦が初て徒弟を集

たる所なり初て教を説たる所なり

摩伽陀Maghada國は恒河Ganges河の南に在り首府を波吒梨那PatalipatraPura と稱し釋迦の徒弟と成し阿闍多設咀路AjataSatrou王の建たる國にて今はパットナPatna府と云ふ舊希臘國の地理學書に詳く記し數百年間相續て繁昌せし國なり

伽邪BodhaGaya街は摩伽陀國の中に在り釋迦は此街に在る畢鉢羅Pipala と云ふ樹の下に於て五年の坐禪を爲し今尚其樹の在を以て天竺の人が多く參詣す元來此地は跋跡姿Prasia と云ふ樹が多く在て繁茂し舊羅馬國の地理學者ストラボンStrabon氏プリヌPlinu氏は此地の人氏をプラジPrasiaと呼り此街の近傍に安和Kehemata と云ふ山あり俗に鵲鳥の足山と稱す昔時羅漢が集會せし所にて今尚佛教の徒は此地を尊崇す

拒奢揭羅補羅 Kusanagara Pura 城は一の名を揭羅闍姞利帝 Rajigrha と云ふ此地は釋迦の高弟頻毘娑羅 Bimbisara 王の建たる城にて近傍に一の山あり賓波羅屈 Vaibhara の山と云ふ山の半腹に大なる洞あり是は初め釋迦の住たる所にて釋迦の死後は徒弟の集會せし所なり

那爛陀 Nalanda 院は支那の羅什三藏 Hiuwtsang が佛教の蘊奥を深り得たる所にて昔時は一万二千の僧侶が常に修業せし所なり天竺の語に毘訶羅 Bihar と在を以て歐州諸國の地理學者も皆之に倣ひ毘訶羅と稱す

オリサ Orissa 領は舊羅馬國の地理學者プリヌ氏が詳に記し世に有名なる所なり此地に補磔迦 Pushpagiri と云ふ山あり山の半腹に一の洞あり洞の中に佛教の大切なる石碑あり

第四部　東天竺

東天竺は昔時の地理學者が充分に研究せざる所なれど今は之を調る人も多く在り然ど未だ充分ならず

時昔ハウンドラ Paundra と云し所を今は補陀 Poona と云ひ孟磨縷波 Kamarupa と云し所をカムルット Kamroop 云ふ

恒河の口に昔時跋那迦 Bunga 領地と稱する所あり今は之をベナレス Bengal と云ふ此地に昔時伽邪含多 Jasar と稱する街あり今は之をヂエリール Jessore と云ふ

舊希臘國舊羅馬國の地理學者が昔時タムラリッチ Tamralipti 領地と云し地を今はタムルック Tamluck と云ふ

第五部　南天竺

南天竺は達親拏波多 Dakshinapedar の國と稱し舊希臘國及舊羅馬

國の地理學者が詳に述たる所にて今はデカン Dekkan の大領と云ふ其中數ヽの小領を有し特に乾陀羅 Ganjam 領羯饒伽 Kalinga 領大悩薩羅 Mahakosala 領突舍薩那 Dhonakakota 領達羅毘荼 Dravida 領乾志補羅 Ganjivaram 坎牛敍嗟 Pandyars 領扈茨 Chera 領恭建那 Konkana 領などの名あり

乾陀羅 Ganjam 領のプーリ Puri 城に娑羅門教の黒 Krishna 神を祭りしヂヤガナダ Jaganada 宮あり今はヂヤゲルナルド Djiguernadp と云ふ紀元後五百年代に支那より參詣せし有名なるハヒヤン氏は此地に於て一大行苑の祭典を實見し其日記中に詳く記し在り是は一本の釋迦の齒を車に乘て引廻し今日に行ふ黒神の祭典と異なる所なし想に佛教が滅亡し其代に此黒神を立て斯る祭典を執行する者なるべし

羅饒伽 Kalinga 領の辛頭波羅香 Sirglapura 城は釋迦の時代に獅子頰 SinghaBahu 王の建たる者にて此獅子頰王は當時錫蘭 Ceylan 島と戰爭せり又た此地に憚陀補羅 Dantapura と稱する街あり佛說に齒の街と云ふ是は皆く釋迦の齒を收たる所にて其後釋迦の齒は錫蘭島のカンヂ城に移し今尚保存し開帳する事あり此羯饒伽領は寒冷紗を製し釋迦の時代より有名なる土地にて舊羅馬國のプリンス氏は之をプリンゲ領と云り

大悩薩羅 MahaKosala 領は梵字の書に有名なる土地にて今の求那跋 Gundwana 領なり

突舍薩那 Dhonakakota 領は佛教の書籍に名が顯れ亦た佛說の碑文に名を記し尤も有名なる土地にて大なる寺あり併し今は此地を港婆羅底 Amaravati と稱す

達羅毘荼 Dravida 領は伽陀 Ghates 山の両方に在る數多の小國を合併し此名を附たる者にて今尚此名を用ふ

乾志福羅 Canjivaram 城は佛教が盛に行れ支那の羅什三藏が佛書を研究し婆羅門師と議論せし所なり

半筱嗟 Pandyans 領は今のマドレ Madura と稱する所にて紀元前數百年に建し美と云ふ繁昌の街あり

月氏領は梵字の書に名が顯れ今はコインバトル Coimbatore と稱す

舊羅馬國の地理學者ピリス氏ポトレメヲ氏の著書に明記する所にて其著書中にカリギコン Kalligicon 崎とカリメール Callymere 崎コマリヤ Komaria 崎と在は即ち今のカベリ Kaberys 河と在は今のカウベリ河羅布羅 Kaberi 城と在は今のカウル城なり

恭建那 Kunkana 領は昔時天竺南崎と稱せし所にて其中にカリヤン Callian てふ領地あり研究して見ば紀元後六百年代の舊希臘國の歴史家コースマインヂコプレーステス Cosmas Indicopleustes 氏の著書に最早其頃此地に天主教會の在し事を識たり

錫蘭島 Ceylon 島

錫蘭島は天竺の領地に非と雖も其南洋中第一接近せる島にて天竺研究に多少關係ある所なり

舊希臘國の地理學者は此島をタポロバヌ Taprobane 島と云り是は全くサンスクリットの書に在るタープラバールミと云ふ語より出たる者なり

亞剌比亞人は此島をシラム Zilam 島と云り併し今は亞剌比亞人と雖も皆錫蘭島と云ふ

印度人は藍摩耶那 Ramayana 書に在る如く此島を指て楊伽提釋波 Langka Dwipa 島と云ふ

ポトレメヲ氏の地理學書に此島の都會をアミラガラモン Amiragrammon と稱し舊希臘國の歴史學者コスマス Cosmas 氏の書翰に紀元後六百年代に最早此地に天主教會の在し事を詳しく載たり

婆羅門教論卷之壹

婆羅門教の基督教及猶太教に相似る箇條

今を距る一百四十年前卽紀元一千七百四十七年に天主教の宣教師が天竺に於て婆羅門教師の秘藏せる聖書を詳しく調べ初て婆羅門教に基督教及猶太教と相似る箇條の多く在る事を認め紀元一千七百五十七年に至り摩提國 Madure 在留の宣教師アセ P. Bouchet 神父が佛國の教正ウエ Huet 公の許へ書翰を以て此事を報道せらる卽ち書翰の大意は左の如し

天竺の人は天主の事も三位一体の譯も能く知り開闢地堂洪水其他万般の事に就て新舊両約全書と同じ說を爲す是は寔に怪き事なり因て余は他の宣教師と力を協しこれが原因を探る爲め曾て巴里府の外國宣教學校に在しドブアヒエ師が天

竺の古跡を調し彼に倣ひ再び古跡の調を爲と欲す尤も余が特に堅ひ所は婆羅門教と基督教の相似る箇條に就て古跡の証據を揚げ根本の同一なる理由を示さんと欲するに在り云々此書佛國に着や直に學者の注意を喚起し逐に一大問題と成て湖江に響き之が原因を探んと欲する人も踵を接で出るに至れり其後數多の星霜を經てブセ Buchet 神父の堅み全く成る

婆羅門教の聖書は名を伏陀と云ふ則ち諳誦伏陀 Rig Veda 夜殊伏陀 Yajur Veda 娑摩伏陀 Sama Veda 阿闍婆拏伏陀 Atharva Veda の四にて皆な新しき者なり其中の古き者はリッグヴェダなるが是は紀元前十五世紀に筆を初め紀元前五世紀に終し証據あり伏陀の注譯なる婆羅門 Brahmana 書修多羅 Sutra 書ウパニシャダ Upanishada

書なんどは紀元前七世紀に筆を初め紀元後十世紀に終し者なり

此外摩拏 Manu 律法と云ふ一の聖書あり是は婆羅門教師が格別に秘藏し人に見する事を禁じ若し人に見する時は忽ち刑を受る定なりしが紀元一千七百八十年に天竺が英領と成し後は斯る定も破れ外國の人と雖も自由に見る事を得て英佛獨三箇國の文部卿が中亞細亞の古代の墨況を調る爲め此書の翻譯に尽力せられし事あり

此等の聖書に説く所と基督教の聖書に説く所と相似る箇條を先づ茲に掲げ續で之が原因を説明せん

第一章　天主の事

昔時の婆羅門教師阿利耶 Ariyas 人は天主の事に就て最も正き

説を爲し天主は一体にして靈の根原なりと云しかと後の婆羅門教師は我慢の爲に迷を生じ萬物皆神と云ふ説を吐き經神論者と成れり想に萬物は天主より造られ天主なければ萬物あしとの説より出たる誤ならん果て然ば全く神の性質を知ざる者にて憐べき事なり

伏陀 Veda 書に曰く誠に一体の天主あり上靈にて世界は是より發せり故に世界の大主なり世界の造者なり云々

ウパニシヤダ Upanishada 書に曰く一体の天主を悟り一体の天主を拜み他は皆な捨よ是は上靈にて如何なる形象ある者も眞似する能はず而て万物は是より發たる故に萬物を照し萬物を活し萬物に樂を與ふ則ち生る者は悉く是に出て活き樂む者は悉く是に歸す云々

ウパニシヤダ書は伏陀書の註解なれば論旨も同一なれど獨り上靈の説に大なる誤あり尤も上靈と云ふ名を用ず單に一の靈あり婆羅賀磨 Brahm と名く婆羅賀磨は限なき意なり云々と説出せり是れ則ち総神論の原因にて大なる誤なり

ウパニシヤダ書に曰く婆羅賀磨は始なく終なき靈なり樂を與へ生を宰る者なり世界は婆羅賀磨の象なり然ど天地を造り萬物を生る業は初の靈のみ之を爲せり又た婆羅賀磨は消滅する事なし故に万生の根原なり又た婆羅賀磨は天地萬物を意の儘に造り之を造に寸分の時間も要する事なし故に世界の眞靈なり又た婆羅賀磨は活たる者なり天地萬物は婆羅賀磨より出て婆羅賀磨に歸る又た婆羅賀磨は天地萬物と一体なり天地万物は婆羅賀磨の思に出て成る故に世界を造り

世界を守り世界を亡す等の事は自由自在なり又た天地万物が婆羅賀磨より出て婆羅賀磨に歸る事は日輪の光が雲より出て雲に歸る如し故に泥土の一塊も婆羅賀磨より出て婆羅賀磨に歸ざる物なし云々

上靈の説は斯の如く大なる誤あり然ど其他の事は基督教の正き説に能く似たり日本の佛教に眞言秘密と唱へ毘盧遮那法身大日如來の圓滿を説は弘法大師の發明に非ず古く天竺より此ウパニシヤダ書の誤を傳たる者なり

ウイスヌ富蘭那 Vishnu Purana 書に曰く婆羅賀磨の成立に有形無形の両個あり有形は滅し無形は滅する事なし滅する者は全世界にて滅する事なき者は常有者なり譬て云ば中央に一の火あり東西南北を撰ず周圍に光と熱を放が如し婆羅賀磨は

則ち中央の火なり全世界は周圍の光と熱なり匝て世界に住む我々は遠近の別あり遠近の別ある故に光と熱が遠近に由て强弱多少の別ある如く上靈の勢力に厚薄多少の別あり云々

ウイスヌ富蘭那書は紀元後八世紀より十一世紀まで數百年間に成立たる書籍にてウイルソン Wilson 氏の説に依ば伏陀書の註解書類數多ある中に最も肝要なる書なり

塵拏 Manu 律法の第壹卷に曰く一に靈あり是は天地万物の造者なり天地万物の根原なり無始無終なり無形無色なり平素天地に充滿し苦樂禍福を知ず万物を意の儘に計ひ全知全能なり無性無名なり血統身分なく情慾なし故に純粹潔白なり世人其名を知ず但ま之を波羅婆羅賀磨 ParaBrahma と呼ぶ者あ

り云々

又た同書に方便度 Upayana と云ふ儀式の事を說て曰く是は禮服の聖き帶を授る儀式なり此式を受て子が父の跡を續て婆羅賀磨師の位に昇る故は父は子に此時秘密蔓陀羅等を傳へ誡て云ふ今後一体の天主を忘べからず天主は天地万物の根原なり汝婆羅賀磨師よ密に之を刊み決て人に云べからず殊更愚人に陰すべし苟も婆羅賀磨師たる者が之を人に云ひ顯す事あらば必ず罰を其身に受んと慎よ〳〵と示し云々

斯の如く一体の天主を信る事に就て聊か誤り在と雖も基督教人の信仰に頗る相似り此事は廣拏律法の第一卷に記し在のみならず波羅婆羅賀磨 ParaBrahma 書にも詳く載たり

第二章　三位一体の事

天竺の哲學者流は常に說を爲て曰く上靈の外に力あり神あり然ど是は皆な一の婆羅賀磨より出たる者にて婆羅賀磨は造物者なり主宰者なり滅物者なり故に一より三に分れ三より一に合ふ之をトリムルチ Trimurti と名く卽ち三体三能と云ふ意味なれど其實三位一体なり云々

波頭摩富蘭那 Padma Purana 書に曰く初めウイスヌ Vishnu と云ふ一の神あり世界を造んと欲し自ら三に分る則ち左の脇よりウイスヌを生じ右の脇より婆羅賀磨を生じ眞中の本体より魔醯首羅 Siva を生ず而てウイスヌは世界を造り婆羅賀磨は世界を主宰し魔醯首羅は世界を滅す此三神共に無始無終不滅不增の上靈にて一体なり天竺に於てウイスヌを拜む者あり婆羅賀磨 Brahma を拜む者あり魔醯首羅を拜む者あり各自異性の

神の如く云ど元來眞神は一にて性も亦た一なり故に區別あ
る事なし云々

波頭座富蘭那書は紀元後十二世紀に筆を初め數年の後に成
立たる証據ありて最も新き書なるが說は甚だ眞理に近し

天竺の習慣と成り人の特別に拜む神はウイスヌ婆羅賀磨魔
醯首羅の三なり此等の神像は皆な一頭一体なれど偶ま三頭
一体の像を造り之をトリムリチ Trimurti と唱へ拜む事あり是は
ラチン Latin 語のトリニタ Trinitas に近く三位一体の意味あり

ペリヌ Perrin 氏の信度多 Indostan 旅行日誌に曰く我等が吟味せ
ざるべからざる大事あり婆羅門教の三位一体は基督教の三
位一体に同じ則ちウイスヌ Vishnu 神が人と成て世に降り强敵
と戰ひ勝て身を陰す說は基督が人と成て世に降り惡魔と戰

ひ勝て天に昇り玉ふ說に同くウイスヌは婆羅賀磨の第二位
と在は基督が天主の第二位と在に同じ云々

是は氏が少く誤れる所あり婆羅門教の三位一体は悉く上靈
の發顯にて基督教の三位一体と同からず然ど似たる事は驚
く程に能く似たり

第三章　創世造物の事

婆羅門教の基礎たる聖書讃誦体陀 Rigveda 書に曰く最初は有者
なく無有者なく天地なく万物なし唯だ暗黑の中に無名者即
上靈のみ一個あり上靈は思の儘に物を生ず是れ万有の根原
なり後に之を無有者と名く是は有者の變化なり上靈は唯一
有者にて此外に有者なし上靈一度世界を造んと欲して忽ち
世界發顯したり云々

是は讃論伏陀の八章七分に在り八章七分は則ち紀元前五世紀より六世紀の間に成立し一分なり

讃論伏陀の註釋波頭摩富闌那 Padma aPurana 書に曰く世界の未だ成ざる前は世界が神の意中に在り故に物の區別なく極度なく智を以て悟る事あたはず混頓として暗夜に眠れるが如なり時に全能の有者一度其意を發するや直に混頓たる彼は散て光明あらはれ目に見ゆる今の世界と五個の原素なる万物の種子出來たり然ど有者は之が爲め己の榮福を減ずる等の事は毫も非ざりし云々

婆羅門教の聖書の中に創世造物の事を初め世界の經區を詳く說く者は摩拏 Manu 律法なり而て摩拏律法に說く所は基督教の聖書たる舊約全書に說く所と頗る相似り今其兩書の相

似る箇條を列記し後に兩書の成立たる年代の証據を揚げ舊約全書の五經は紀元前十六世紀に出來たる者にて摩拏律法は紀元後五世紀より八世紀の間に出來たる者なり然ば摩拏律法は舊約全書の五經より凡そ二千五百年の後に成立たる者にて則ち舊約全書の摸擬なる事を說明せん

第一節　創世の事

Genesis 創世記 第一章

一節　始時に天主天地を造り玉ふ

二節　大地虚曠淵面晦冥なりき

三節　天主光明あれよと曰ひ忽ち光明あらはる

二節　天主の靈は水面に發座し玉ふ

Manu 摩拏律法 第一章

五節　始時は天地万物なく世界晦冥にて混頓たる恰も暗夜に眠れるが如なりし

六節　混頓の中に一自有者あり光明を放ち晦冥を散し五個の元素を以て天地万物を造る初て水を生じ其中に一の種を置く種の中に万物の大祖たる婆羅賀摩あり上靈を生ず

Genesis 創世記

一章二節　注に鶏の卵を抱く如く天主水上に座し玉ふ

仝六節　天主水中に穹蒼あらはれよと曰ふ

仝七節　天主穹蒼の上下に水を分ち玉ふ

仝八節　天主穹蒼を天と名け玉ふ

仝十節　天主乾土を地と名け水の集る所を海と名く

Manu 摩拏律法

一章九節　初め水の中に置一種は金の如く光る卵なり

仝十節　水を那羅 Nara と名く靈と云ふ意味なり

仝十一節　水の動く所を那羅延 Narayana と云ふ

仝十二節　主が意に由て金の如く光る卵を二に分る

Genesis 創世記

一章二十節　天主各自く其類に由て魚鳥を造り玉ふ
全廿五節　天主走獸昆虫を造り其類に從はしめ玉ふ
全廿七節　天主人間を造り成立を天主に肖り玉ふ
二章七節　塵を以て人を造り生氣を鼻に吹入たまふ

Manu 摩拏律法

一十三章二に分し卵が天地と成り水の絶ぬ息を生ず
全十四節　主が覺魂の智惠を上靈より出せり
全十五節　而て智惠の根本より三德を出し五司を生ず
全十六節　此時一切万物を造る
全廿一節　上靈は受造物に名と實と業を定む

第二節　天使の事

Hebreo 希伯來書 一章十四節　天使は頭領の靈なり

Daniel 但以理書 七章十節　其命に從ふ天使千人其前に立る天使万人あり

Manu 摩拏律法 一章廿二節　上主數多の神を造る是れ靈の不可思議なる者にて見へず而て格別に働く靈魂あり

伏陀 Veda 書の註釋ウパニシャタ Upanishada 書に曰く初め一の宰者あり火焰の形容に現る彼れ受造物の不完全を知て自ち天使の中に守護の位を定め之を曷羅闍 Radja と名く則ち人を守護する天使あり獸を守護する天使あり云々

是は舊新兩約全書の說に最も能く似り舊新兩約全書に天主が天使をして世界万物を守護せしめ玉ふ事は明に顯れ且つ舊約全書にルシフエル Lucifer と云ふ天使の名ありルシフエルと云ふ語は火の光と云ふ意味にて火焰の形容と云に近し

舊約ダニエル Daniel 書に天使はイスラエル Israel の守護と顯れ教會の守護と顯る云々と在り又た同書ゐギリシヤ Grecia の大將と云ひペルシヤ Persia の大將と云る者は皆な天使の事にて天使が天主の命に由り常に其國の人民を守護する事を述たるなり

世界に有名なる佛國のボスエ Bossuet と云ふ司教は新約全書の默示錄を詳く調べ世界万物は天主の命に由り絶す天使の守護する事を目に見る如く說明せり

又ウパニシヤダ書に曰く昔し名を陳那 Djin と呼ぶ惡鬼が天使と戰ひ天使は祈と主の名に由て勝利を得たり云々

是は新約全書の默示錄十二章大天使ミカエル Michael 天に於て惡魔と戰ひ大に勝利を得て惡魔を逐出す云々と在に似り

婆羅賀磨論 Brahma Sastra 書に曰く無始無終の者あり寔に不可思義なるマイサスラ Maisasura と數多の天使を造り己が光榮を顯す者に幸福を與んと欲せり然に不可思義なるマイサスラと數多の天使の中に妬を起せる者あり遂に謀反を企て黨を組み無始無終の者に逆ふ囚て無始無終の者は彼等を逐ひ之に不滅の苦を與へ暗冥の中に投入たり云々

是は舊約イザヤス Isaias 書十四章に大天使ルシフエル Lucifer 至高の雲に登り我座を天主の上に置き自ら天主の天主たちん

と欲せり故に天主は罰を加へ暗冥の地獄に投入て不滅の苦を與へ玉ふ云々と在に能く似り

使徒ペトロ Petro 後書の二章にも天主は犯罪の天使を地獄へ投入たまひ公審判の時まで暗冥れ穴の中に置たまふ云々と在て婆羅賀磨論 Brahma Sastra 書の說に能く似り

因に云ふ婆羅賀磨論書は紀元後十三世紀イザヤス書は紀元前七世紀ペトロ後書は紀元後六十八年に出來し者なり

Genesis 創世紀 第一章 二十七節

第三節 人の事

天主が自分の成立に肖り人を造り玉ふ而て天主は初め人を男女に造り玉へり

Manu 摩拏律法 第一章 三十二節

無上者の体は半分男性にて半分女性なり女性の分より弗栗特 Viradj と云ふ者を生ず

Genesis 創世記 二章

二節 天主が人を男女に造り男をアダンと名玉ふ

廿一節 アダン Adam の眠る間に脇の骨拔肉を滿し玉ふ

廿二節 天主い骨を以て女を造りアダンに與玉へり

Manu 摩拏律法 第一章 廿三節

弗栗特は Viradj 男性女性を合たる者にて神なり之より一の男性を生ず之を摩拏と云ひ摩拏も神にて一無上者なれば万物を創造する能力あり

摩拏律法に初の人を男性女性の人と說る誤の原因は舊約の創世記一章廿七節に天主は初め人を男女に造り玉ふ云々と在る一句ならん是は然も在べき事にて歐洲の或る學士が此句を誤解しアダンは男女両性と云ふ說を立たる事あり

天竺のエレファンタ Elephanta と云ふ所に有名なる古跡あり婆羅門教の昔時の聖殿にて地中より堀出たる石造の建物なるが中央に一の大像あり三位一体の形にてトリムリチ Trimurti と名く右の方に人の像あり顔面左右の分れ一方は男にて一方は女なり是れ則ち男女両性の形にて弗栗特 Frigt と名く左の方に男女二個の像あり中間に一頭の大蛇を狹み大蛇は口に密柑の如き菓を含む是は全く祖人の樂園に栖む形なるべし此等の像を彫し年代は確ならねど紀元後の物なる事は確に証據あり

ウパニシャダ Upanishada 書に曰く初の人をアヂマ Adima と名くアヂマは一人にて淋く思ひ他に人あらん事を望しかば不意に己の体が二に分れ一人の女を生ず云々と是は舊約全書創世記中に在るアダン Adam の説に能く似り

第四章　樂園の事

婆羅門教に樂園及生命樹原罪等の説あり曰く初婆羅門教 Brahma が人を造り之を樂園に置く園中數多の樹木繁茂し一の奇樹あり其菓を喰ふ者は不滅の德を生ず下等の神が頻に不滅の德を望み此菓を採て喰ふ時に狡猾なる惡蛇あり下等の神を唆ひ忽ち毒氣を吐て全地に散し地上の人は悉く毒氣を受け遂に穢たる者と成れり魔首羅 Siva と云ふ上等の神之を見て大に人を憐み人を助る為め自ら人と成て世に降り全地に散し在る惡蛇の毒氣を呑尽し人の穢を清め云々又た一説に昔時ガンゼス Ganges 河は樂園の中央に流れ周圍に不可思議なる樹木繁茂して菓を結び若し之を喰ふ者は百年

の壽命を得たりと云ふ此等は皆な雷約全書の説に能く似り

第五章　偉人及壽命の事

Genesis 創世記 第一章 四節

一節　人は漸次に繁殖し遂に天主の子が人の子の美麗を見て彼等を結婚せり

四節　天主の子が人の子と結婚し偉人を産む偉人は英雄と成り甚に顯はる

Manu 摩拏律法 第一章 三十四節

摩拏地上に人を造り初て十名の偉人を生ず則ち人の頭にて大仙人 Maharichis と名く彼等大力あり七つの神の類を生じ又た住所を造り遂に大力ある龍を産む

Genesis 創世記 第一章 四節以下

初の人は數百年の命なりしがセットの子孫とカイヌ Cain の子孫が結婚し惡行を爲す故に天主は人の命を縮め僅か百二十年と定めたへり

Manu 摩拏律法 第一章 三十八節

初の人は病なく憂なく都の望み足て命も長く皆な四百年餘なりしが漸次に縮り終に其時の四分の一にも足ざる者と成れり

斯の如く摩拏律法に偉人の説あり創世記も亦た偉人の説あり摩拏律法に壽命の説あり創世記も亦た壽命の説あり而て両書とも偉人十人の名を揚たれど茲には之を畧す

第六章　洪水の事

婆羅門教に於て洪水の說は梵字の大蔓陀羅の中に在て明かなる耳ならず聖書夜殊伏陀 Yadjur Veda 書の註釋サタバタ婆羅門 Cathapatha Brahmana 書婆伽婆多富蘭那 Bhagavata Purana 書大戰 Mahabharata 書なんどに詳一中に就て最も詳き者は大戰書なるを以て茲に大戰書の說を揭げ創約全書の說に似る事を示す

因に云ふ種々の証據に依て調べ見にサタバタバラマナ書は紀元前八世紀乃至紀元後十五世紀に出來婆伽婆多富羅那書は紀元後十二世紀に出來大戰書は紀元前一世紀乃至紀元後十二世紀に出來たる者なり然ば此等の書に紀元前十六世紀に出來たる創約全書の五經と同じ說あらば全く之が摸擬に相違なかるべし

Genesis
創世記

六章八節　ノエ No3 天主の前に惠を護たり

七章六節　全九節　ノエは能く天主の命に從ひ義人なり

洪水地上に溢し時ノエ已に齡六百歲なり

Mahabharata
大戰書

ワイスワスワタ Vaisvaswata の子に摩拏と云ふ義人あり大國の王にて權威父祖に勝り數百年間修業の爲め目瞬せず手を揚げ首を低れ片足を以て久く行む或時一尾の小魚大魚に逐れ娑樓那 Varuni 河の岸に來り助を求む摩拏 Manu 之を憐み抹て水器に入置しが漸次に太しかば池に放ち又恒河 Ganges 河に移す日を經て大魚と成り海に入ん事を望みしかば躍て海に入たり

Genesis 創世記 第六章

十三節 天主ノエ Noe に告て曰く兆民の末期我前に至れり

十七節 洪水地上に溢れ肉血の生氣は都て皆な滅ん

十四節 汝は好木を以て舟を造瀝青を内外に塗べし

十八節 汝と汝の妻子と都て八人其舟に乘べし

廿一節 汝は諸の食物を携へ舟に貯れ

Mahabharata 大戰書

魚が海に入る時摩拏に語て道く汝は我を助し故に我今大事を汝に告ん近き中に洪水地上に溢れ生物悉皆消滅する事あり汝は之を避る爲め疾く舟を造り汝はリチ郎ち仙人七名と其に其舟に乘り永く保つ爲め都て草木の種子を舟に積べし

Genesis 創世記

六章廿二節 ノエ天主の命に從ひ悉く之を行へり

七章十節 洪水四十晝夜地上に溢れ勢ひ甚だ盛なり

全十八節 遍地の洪水流動し舟は水面に漂ぬ

全十九節 水愈横流し天下の高山は皆な沈沒せり

全廿三節 地上の生物は悉く滅び船中の物のみ存す

Mahabharata 大戰書

摩拏は魚の語に從ひ船を造り仙人七名と共に乘り都て草木の種子を積み大海へ漕出たり時に魚は角を生じ海面に顯る摩拏之を見て忽ち繩を角に懸げ舟を繫や直に洪水と成り遂に天も地も水の爲に沈み摩拏の舟のみ殘し他の物は皆な滅たり

Genesis
創世記
第八章

三節 水は漸く退き百五十日を經て治り
四節 船はアルメニヤ國の山の頂に止る
十六節 天主ノエに曰く汝は妻子と共に船を出べし
十七節 汝と共に在し禽獸昆虫を出繁ならしめよ
廿一節 人及諸動物は我れ再び罰て滅す事なかるべし

Mahabharata
大戰書

洪水地上に漲る數年の間は魚が船を護り遂に仙人が意麻利耶山の頂に船を繫ぐ魚は此時仙人に語て道く我は是れ婆羅賀磨なり魚の形を藉り來て汝等を助く今後一切の動物人間鬼神は都て塵拏より生じん我は之を守り再び斯る混雜なからしめん云々

ドブア Dubois 神父ブセ神父の說に依れば梵語の塵は大なり拏は新なり摩拏 Manu は卽ち大新と云ふ義にて舊約全書のノアNoに同じ又た廣く各國の書に質し見れば梵語の摩拏はエヂプト語のメチスギリシヤ Grecia 語のミノス Minos ゼルマン German 語のマヌス Manus 英語のマヌ Man 等に同く人と云ふ義なり尤も讚誦伏陀 Rig Veda 書には始終マヌを智惠ある人間と云意味に說たり婆羅門敎の說に依て洪水の年代を調べ見にカリユガと云ふ天竺第三の劫の終に當り古典古跡の証據に依てカリユガ Kaliyuga と云ふ天竺第三の劫の終を調べ見に紀元前三千年の頃に當る之を創世紀の洪水より基督まで三千餘年と在る正き說に照し見ば驚く程お能く似り

第七章 カムの罪及罰の事

Genesis 創世記 第九章

十八節 船を出しノエNoeの子はセムSem カムCham ジャペットJaphetなり

二十節 ノエは初て農夫と成り園に葡萄を造る

廿一節 其汁卽酒を飲醉て裸に成り陳幕の内に臥す

廿二節 カムが父の裸を見て兩個の兄弟に語る

廿三節 セム、ジャペット衣を肩に懸反歩し父に覆ふ

Padma Purana 波頭摩富蘭那書

全地の大王サチャヴラタSatyavrata三人の子を持り之をセルマSarma カルマCharma ヤペチYapeti と云ふ彼等善人にて品行方正なり父は大に喜び位を譲んと欲する時に臨み圖らず酒に醉て氣を失ひ裸に成て眠るカルマは之を見て兩個の兄弟に嘲りセルマ、ヤペチは衣を採て裸の父を覆ふ

Genesis 創世記 第九章

廿四節 ノエNoeは醉醒て稚子の所業を知り

廿五節 曰くカムCham は天罰を受け兄弟の僕の僕と成べし

廿六節 セムSemの神たる天主を頌よ カムは必僕たり

廿七節 天主はジャペットJapletの子孫を殖しセムの幕の内に住し玉ん カムの子孫は其僕たるべし

Padma Purana 波頭摩富蘭那書

大王醉醒て其子の所業を知り忽ち賞罰を定て曰くカルマCharma は我を嘲り故に名を嘲と呼び奴隷の奴隷と成れセルマSerma は雪山の南方に在る廣き地を領し此地の大王と成りヤペチYapeti は雪山の北方に在る廣き地を領し此地の大王と成べし

此事は格段に能く似り英國博士ジョンスJohns氏も亞細亞研究書の第三卷に之が翻譯を揚げセム、カム、ジャペッド三人の名の能く似る事に驚ケリ

第八章　婚姻の事

婚姻の事に就て婆羅門教の定と天竺の習慣を調べ見に全くモイゼスMoyses の定とイスラエルIsrael人の習慣を守る者の如し此事は宣教師ドブアDubois神父の天竺習慣書にも詳載たり民數記廿六章六節を見にモイゼスは天主の命に由りイスラエル人に他蕃の女を娶る事を禁ず故にイスラエル人は多く親族の女を娶り又た己が支派の女を遠方に求め之を娶る者も在し則ちアブラハムAbrahamは親族の女を娶りイザアクIsaacは支派の女を遠方に求め之を娶れり

婆羅門教の定に由り天竺の習慣は一般に親族の女を娶り數百里の遠方に在る親族の女を求め之を娶る者も多し

イスラエルIsrael人は概ね男子十八歳にして妻を娶る定なりしが婆羅門教の徒も亦た凡そ男子十六歳にして妻を娶る定ありイスラエル人は妻を娶る爲め男子が其妻の家に奉公する習慣あり即ち創世記にジャコブJacobがラバンLabanの家に七年奉公し娘のラケルRachelを妻に娶し事を載たり天竺に之と同じ習慣あり即ち求婚の男子が同蕃の人の家に奉公し其家の娘を妻に娶る尤も奉公の給金を婚禮の入費に充る約を結び奉公の年期はジャコブの如く七年なり倘は婚姻の事に就て婆羅門教の聖書たるマヌの律法と其聖書たるモイゼスの律法と相似る箇條を左に掲ぐ

Numeri 民數記 廿六章七節 都て同じ血統の女を娶る可し

全章八節 女の家督を續ぐも同じ血統に於て爲す可し

Tobias トビヤ傳 十二章十二節 ラゲル Raguel 女の手を採りトビヤの手の中に置く

Leviticus 利未記 創世記 二十三章十八節 父母を離れ夫婦と成る時は二者一体と成る

十六節 兄弟の妻に班を與ふ勿れ蓋は兄弟を穢なり

Manu 摩拏律法 三章四節 教師の指圖に依り必ず同蕃の女を娶る可し

全五節 祖父母六代後の血統に出し女を娶る勿れ

四十九章四十三節 同蕃の男女結婚の時は握手の式を行ふ可し

全五十五節 夫婦は同体なり離る可からず

五十八節 婦が子を望み夫の兄と通る時は放逐すべし

Deuteronome 復傳律例 廿五章五節 兄弟一所に住み若し一人が子を産ぬ中に死る時は死者の妻が他人の妻と成を得ず跡に殘る一人の兄弟の妻と成り死者の爲に子を産む可し而て産む所の次男に必ず死者の性名を授け相續すべし

Manu 摩拏律法 九章六十九節 已に結婚し或は結婚の約を爲し夫の死る時は女が他人の妻と成を得ず親族に相談し死者の兄弟の妻と成る可し

三章五十九節 妻が子を産す己れ頻に子を望む時は兄弟に相談し妻と兄弟の通る事を許す可し

Deuteronome 復傳律例 第廿四章

一節　若し妻に不潔の罪あらば離縁書を妻の手に渡し家より出して別居さすべし

Manu 摩拏律法 第三章

七十二節　正く娶し妻と雖も邪淫の罪あるか或は惡疾の兆あらば早速追出べし

第十章　禁食誡穢の事

摩拏 Manu 律法に在る禁食誡穢の箇條はモイゼス Moyses の律法に在る禁食誡穢の箇條に能く似り因て之を左に掲ぐ

因に云ふモイゼスの律法に在る禁食誡穢の箇條を悉く宗教の玄義と想ひ誤る勿れモイゼスはイスラエル Israel 人の首なれば衛生取締の爲に設し箇條も多く在り。

Deuteronome 復傳律例 第十四章

三節　都て不潔の物を食す可からず

十二節　食す可からざる物は鷹鳶

十四節　凡て鴉の類

十五節　駝鳥梟の類

十六節　蝙蝠の類

Manu 摩拏律法 第五章

十一節　娶羅門師の食す可からざる物は左の如し

十二節　雀鶴燕鷹其他市街の店に在る肉類

十三節　嘴を以て物を割る鳥と足に水抓の在る鳥

十四節　半は水に栖み半は陸に栖む獸の類

十七節　山に栖む猛き獸と名の知ぬ鳥と

Levitique 土師記 第十章 十四節 十五節

イスラエルの祭司よ汝と汝の子は供物に爲し動物の胸と肩を食す可し蓋はイスラエルの供物に於て汝等れ爲に殘されたる分なり是は天主の命に因り永く傳はる定にて供物に爲し動物の胸と肩い汝と汝の子に與らる

Manu 摩拏律法 十五章 廿七節 廿九節

命の危に迫る時は供物を食して妨なき定あり故にジュシャDvidjaと云ふ婆羅門教の行者は常に儀式を以て尊ばれ或は祈禱を以て尊ばれ既に供物と成し犧牲の肉を食する許あり食する許ある獸の肉なくんば有べからず

Numeri 民數記 十九章 廿二節 廿四節 廿五節 廿六節

十一節 都て人の死體に手を觸し者は七日の穢を受

廿二節 穢を受し人に手を觸し者も亦た穢を蒙る

十四節 死人の在陣幕の内へ入し者は七日の穢あり

十五節 死人の在陣幕の内に置し器物は穢あり

十六節 野外の死體骨塚等に手を觸し者は穢あり

Manu 摩拏法 第五章 八十五節 八十一節 八十二節 八十七節

六十四節 手を人の死體に觸し者は不淨なり

八十五節 不淨の人に手を觸し者も亦た不淨なり

八十一節 死人の在る家に留る者は不淨なり

八十二節 死人の家に在る器物は不淨なり

八十七節 人の骨に手を觸し者は不淨なり

Lévitique 利未記 十五章 二節以下

凡て白濁を患る婦人は穢れ且つ彼が臥床衣類器物も皆な穢る故に若し手を觸し時は水を以て洗ひ清む可し又た月經の婦人は穢れ且つ彼が臥床衣類器物も皆な穢る故に若し手を觸し時は水を以て洗ひ清む可し

Manu 摩拏律法 第五章 六十三節

血の泄る病を患る婦人は不淨なり月經の婦人は不淨なり一旦他人の妻と成し婦人を娶り子を産む時は不淨なり彼等の臥床衣類器物も皆な不淨なり之に手を觸し者も亦た不淨なり洗ひ清む可し

天竺の習慣に若し婦人が子を産む時は家内の者が悉く十日の穢を受け子を産し婦人は一月の穢を受る者と爲し其間他人と交際を絶ち一室に籠る事あり

ジュデヤ Judea 人の規則に若し婦人が男の子を産む時は四十日の穢を受け女の子を産む時は十日の穢を受る者と爲し其間他人と交際を斷し事あり是は舊約全書の利未記十二章二節に在るモイゼスの律法を守れる者なり

天竺の習慣に死人の在し家を穢れ在る家と爲し之を清る爲め香と水を以て祈禱する事あり祈禱の時はプロヒタ Pourohita と云ふ婆羅門教の祭司が供物を捧げ嚴重に儀式を執行す

ジュデヤ人の規則に死人の在し家は穢を清る爲め祭司を請じ供物を捧げ灰と水を以て七日の儀式を行ひ七日目に家内

中が水を浴て身を清る事あり是は舊約全書の民數記十九章に在るモイゼス Moyses の律法を守れる者なり

婆羅門師は犬を穢の獸と爲し誤て犬に觸る時は衣服も脱て其儘水中へ飛込清浮の祈禱を爲す是はジュデヤ Judea 人が格別に犬を穢の多き獸と爲し之を厭ふ習慣あり一餘波ならん

第十一章　風俗の事

都て天竺の風俗はジュデヤ人の風俗に能く似り故にドプア Dubois 神父は天竺習慣書に於て今の天竺の風俗は昔のジュデヤ人の風俗に相違なしと斷言せられたり

天竺人の或る地方に於て頭上より足下まで體の毛を殘ず薙り漸く眉と髯を存る風俗あり若し婚姻の儀式を行ふ時は婆羅門師が來り毛の有無を第一に檢査す是れ則ちジュデヤ人の

風俗に同じ舊約全書の民數記八章七節に潔水を灌ぎ全體を薙と記し在るを以て知る可し

又た或る地方に於てシドーミ Cudhumi と稱し頭の頂に髮の毛を少し殘す風俗あり是れ飼ちジュデヤ人の髮へ之を編て後へ垂す風俗に同じ舊約全書の他に以理書十四章卅五節に一位の天使出現しハバクコ Habacuc と云ふ農夫の頭の頂に在る髮の毛を摑み瞬く間に遠くバビロン Babylone 地へ行と記し在るを以て知可し

頭の頂に髮の毛を少し殘す事は天竺に限らず支那ペルシヤ Persia 等に斯風俗あり日本に於て小兒の頭の頂に髮の毛を少殘す風俗の在も多少ジュデヤ人の風俗に緣故ある事ならん

天竺は一抱に髯を初め總身へ恒に香油を塗る風俗あり是はジュデヤ人が規則の如く嚴重に守し風俗なり

天竺の人は親に離れ夫を失ふ等の憂に遇ふ時は故らに悲み極る容を爲し衣を裂く者あり髮を剪る者あり是はジュデヤ Judea 人が親族に離し時は故に悲哀動哭の容を爲に能く似り又た天竺の人は毎朝清水を以て顏を洗ひ額に火を點て自ら深く罪を悔ひ徵と爲す是はジュデヤ人が頭に灰を冠り深く己の罪を悔ひ徵と爲に能く似り

天竺に於て祭司の職を奉る者は婆羅門 Brahma の蕃に限る定あり是はジュデヤ人の中に祭司と成る可き者はレビ Levi の蕃に限る定め在に能く似り

天竺の人は寺院に參詣し或は高位の貴人に遇ふ時は必ず履を脱ぐ是はジュデヤ人の風俗に同舊約全書にマデアン Madian のホレブ Horeb 山アラビヤ Arabia のシナイ Sinai 山に於て天主が

モイゼス Moyses に向ひ此所は聖地なり履を脱と命じ玉し事を載たり

天竺の人は一般に古考を信じ婆羅門師の學問は占考を專一と爲し阿闍婆摩伏陀 Atharvana Veda と云ふ聖書に占考の事を詳く載たりジュデヤ人も原は占考を信じ占考を爲す者は大に人の望を得り然ば申命記十九章廿節ゐ誡の詞あり

第十二章　寺院の事

天竺の南方に婆羅門教の古跡あり廣大なる寺院にて建築の模樣はジュデヤのゼルサレム Jerusalem に在しサロモン Salomon の聖殿に同じ依て左に双方の模樣を列記す

因に云ふ此寺建築の年代を調べ見に種々の証據あり一千二百年より古からず之を舊約全書の列王傳に在るサロモンの

聖殿建築の年代に比る時は一千五百年の後なり

Temple 聖殿

ゼルザレムの聖殿は三重の圍を造し塔の如く高き樓門を四方に設け東の門は金の飾を爲し金門と名け西の門は美き飾を爲し美門と名く門の柱は臘石を以て拵へ百端の彫物あり尤も東西の二門は南北の二門より巨大なり

Pagodes 寺院

天竺の寺院は七重の圍を造し東西に山門あり南北に小門あり何も塔の形に造り奇數の階を設け上に月の紋章を揭ぐ門の柱は一本の石を以て拵へ細密なる彫物あり尤も東西の山門は南北の小門に比て格段に美麗なり

Temple 聖殿

一番の圍を外教人の圍と名け臘石の柱に細密なる彫物あり二番の圍をジュデヤ人の圍と名け金を以て柱を包み圍の中は臘石を敷詰たり三番の圍を祭司の圍と名け中央に高臺あり高臺の傍に兩個の銅器を備へ水を滿す是は儀式の時に手を洗ふ爲なり

Pagodes 寺院

都て圍は平面の屋根を設け天井に種々の飾を爲し柱は一本の石を用ひ床に樣を造り各番の人が己の格式に應じ定め圍に住ひ裝飾門師の住所は中央の圍と定め高臺を設け偶像を安置し燈明を照し傍に一個の水器を備ふ是は祭の時に手を洗ふ爲なり

Temple 聖堂

祭司の圍中に奥殿と稱する所あり儀式に與る祭司の外は出入を禁ず奥殿の中央に聖所と稱する所あり東の方に一の入口を設け幕を陳て隔と爲し中に天主の約束の櫃を安置す此所は嚴に人の出入を禁じ一年に一度祭司の長が出入するのみ

Pagodas 寺院

寺の中央に奥院と稱する所あり院内を三區に別ち一區は椽の如く拵へ一區は供物を並る所と爲し一區は偶像を安置す東に一の入口あり常に閉て人の出入を禁じ祭の時は祭司が之を開き儀式に與る者を迎て中に入る中は寛に低く狹し

第十三章　救主降生預言の事

新舊両約全書を照し見に基督降生以前ジュデヤ人は天主の聖約と聖人の預言に由り孫め基督が世界万民の罪を償ふ爲め降生し玉ふ事を知り降生の期に近く頃は獨りジュデヤ人のみならず東方諸國の人も皆なシビロSibylleと云ふ占書の說とエトルリヤEtrurieと云ふ占者の判決に山て之を悟り何も干魃に雨を望む如く基督の降生を待慢し所へ基督降生し玉ひ預言の通り初て羊飼が之を拜し次に東國の天文博士三人異星に導れ來り拜すジュデヤの王は之を妬み基督を殺んと欲する等の事あり裏羅門教の聖書に之と能く似る說の多く在を以て今其二三を左に掲ぐ

富蘭那Purana書に曰く世界万民は己の罪に由りパタラPatala即ち地獄に陷る時の迫し事を悟り自ち悔てウイスヌVishnu神と

他の神の協議に由り救主を降し惡魔の力を壓へ玉ん事を望みウィスヌ神の約束を得て救主が羊飼の家に生れ玉ふ事を待し云々

ウィスヌ大神八番の降生黑Krishna神の履歷書に曰く天竺の國王カンサKansaは救主の降生を聞て忽惡念を生じ是は國王の位を奪ふ爲に來れる者なり速に殺す可と命じ兵を遣る云々波頭摩富蘭那Padma Purana書に曰くパリPaliと云ふ鬼が極樂往生を望みウィスヌ神の手に係り死ん事を請過然どウィスヌ神は之を許す懇切に諭て云ふ汝は罪の深き故に極樂へ行く能す暫く醫と成て世に住み時を待つ可し我れ再び來り世を變し義を改め汝を極樂へ誘導せんと約束したり云々

塞建陀富蘭那Skanda Purana書に曰くカリユガKaliYugaの時代を距る三千年の後にサリバーナSalivahana卽ち磔と云ふ名の他人が現れ世人を凶惡の中より救ふ可し云々と此事に就て調べ見にサリバーナSalivahanaと云ふ仙人は基督降生後七十九年に八十四の高齡を以て死す此人五才の時が恰どカリユガKaliYugaの時代を距る三千年の後なり尤もスカダ富蘭那Purana書は基督降生後一千年に當りマムドMahmoudと云ふ國王の時代に出來たる書物にて寔に新き証據あり

今を距る百年以前耶蘇門派の教師に有名なる學者あり天竺の古跡を調べテリンガTelingaと云ふ書のバルタサブトラButtaChastraと云ふ書を引て婆羅門教の救主降生の說と基督教の救主降生の說の能く似る事を述べ尋てカルメットCalmotteと云ふ教師が綿密に之を調べテリンカと云ふ書に於てバルタサスト

ヲと云ふ書は梵語の大戰Mahabarata書なる事を示せり故に大戰書の說と新舊兩約全書の說と相似る箇條を左に揭ぐ

Mahabarata 大戰書

カリユガKaliyuga時代の末に當り好城Sambhala城下にウイヒスエズVishnu yesuと云ふ娶羅門師が生れ人に學ず人に問ず自ら聖書の奧義を解し万物の玄理を嫌へ遂に現一切世間Sarva Buddhaと名く現一切世間は万物を悟と云ふ義なり

Joann 十八章 十四節

祝日に當り耶穌は聖殿に於て聖書の講義し玉ふ時にシユデヤの衆人が之を聞て大に驚き互に語て云ふ此人は幼少より學問する閑暇なし如何して聖書を斯く明に解し且つ人に語り得や疑と怪し

Mahabarata 大戰書

娶羅門師の血統にウイヒスエズVishnu Yesuが生れ其書に雜り在る罪の穢を散し人を義と信に固め異る業を行ひ馬の犧牲を捧げ世界を從はしむ

Isaias 舊約全書

イザヤス九章七節に曰く救の國は世界に廣り親睦は漸次に增加しダビドの位と國に於て義と信を固く守る事は永く絕ざらん

マラキヤス一章十一節に曰く日の出る所より日の入る所に至まで我の名は高く聞へ何の地に於も我に犧牲を捧る事あらん

Mahabarata
大戰書

ウイヒヌエズは老て己が修業の爲め沙漠に入りウイヒヌ羯摩 Vishnu Karma が之に結で世界万民を義と信に固め他の四善に己が規則を守らしむ此時は世界最初の如く鎮り上主が万民に犧牲を廣め玉ふ故に万民は皆な之を捧げ沙漠に於て定に從ひ犧牲を捧る事あらん

Malachias
舊約全書

マラキヤス三章一節に曰く汝の求る主が來り金を練り銀を鎔し之を清る人の如く産を定め大義を以て犧牲を聖父に捧る事あらん

Mahabarata
大戰書

要羅門師は犧牲と宗教の儀式を絶ず行ひ益す善德に進み修行を固く守り聖書の意味を能く解し人を善德に導き誠の心を以て祈禱を爲す故に上主は惠を垂れ時く時は雨を降し刈る時は日を出し豐年打續て地上の民は滿足す可し

Isaias
十一章

エセと云ふ聖人の嘗前の蔓が榮へ花を開き義を以て腰に帶を爲し、狼が羊と共に宿り猛虎が山羊の傍に憩ひ牛馬獅子紅羊が一所に栖み幼兒が彼等を悉く救ひ世は誠に開け行て山に猛き獸の害なからん

第十四章　救主の事

救主の事に就てサリバーナ Salivahana 仙人の履歴を調べ見に基督の履歴と能く似り特にサリバーナと云ふ名は磔と云ふ意味あり神の子と云ふ意味あり大工の子と云ふ意味あり卽ち基督は大工の子なり神の子なり磔られ玉へる者なり

阿耆尼富蘭那 Agni Purana 書に曰くサリバーナは童貞を守る婦人に胎り産れ出る時は天使が現れ衆人は之を敬ひ國王は之を殺す工を爲し五の歳に國中の學者をして感服せしむ云々と卽ち基督は童貞マリヤに胎り産れ出る時は天使が牧童に現れシュデヤ Judea の衆人は之を敬ひ國王ヘロデス Herodes は之を殺す工を爲し十二の歳に數多の學者をして感服せしめ玉へり

英國の學士ウイルフォード Wilford 氏の著書にサリバーナの年代を揚て紀元後七十八年と在此年ば天竺のカラミナ Calamina と云ふ城下に於て十二宗徒の一人なるトマス Thomas 聖人が致命せられし年なり想にサリバーナの履歴が基督の履歴に能く似る事はトマス聖人の傳道に由て天竺の人が基督の履歴を知り之を基礎と爲てサリバーナの履歴を組立たる者ならん

プレムサガル Prem Sagar 書に在る黑 Krishna 仙人の履歴を調べ見に是も亦た基督の履歴と能く似り尤も黑と云ふ名はキリストの訛と云も可なり

黑仙人はトリムリチ Trimurti と云ふ三位一体の神の第二位にて履歴の中に最も貴き所は廻生の事なり卽ち基督は天主三位一体の第二位にて履歴の中に最も貴き所は復活なり黑仙人

はヤドと云ふ人の血統に産れヤドはジュデヤのジュダと云ふ聖人の名に能く似り

黑Krishnaは夜半に産れ數多の羊飼が拜に來り其後カンサKansaの害を避る爲め母ヤリダが黑を携へ遠き國へ逃たり基督も厩の中に於て夜半に産れ玉ひ數多の牧童が天使の告に由て拜に來り其後ヘロデスHerodes王の害を避る爲め聖母マリヤが基督を携へ遠くエヂプトEgypteへ逃たまへり

黑の産し時は數多の卜者が集り子の爲に將來の吉凶を卜ひ基督の産れ玉ふ時は數多の學士が集り國王の命に由て子の爲に調を爲り

カンサ王は黑を殺んと欲して認め得ず遂にヤドYudu蕃の男兒を悉く殺せりヘロデス王も基督を殺んと欲して認め得ず遂

にベトレヒムBethlehemの男兒を悉く殺せり

黑に義父あり名を難陀Nandaと云ふ常に能く黑を護りカンサ王の害を避る爲め黑を遠き國に伴へり基督も亦た義父あり名をジョゼフと云ふ常に能く基督を護りヘロデス王の害を避る爲め基督を遠くエヂプトに伴へり

黑は幼時其母と共に旅行し或る城下に止り母が頻に心配して探せし事あり基督も幼時其母と共に旅行し獨りゼルザレムのJerusalem聖殿に止り玉ひ母が頻に心配して三日三夜寢食を忘れ彼方此方を探せし事あり

黑は常に從ふ羊飼に己が本國を示し萬祀の住居を見たり基督はタボルTiborと云ふ山の上に於て常に從ふ使徒に天國を示し光榮の姿を現し玉へり

斯の如く似り故に無神論者と淺學者流は新約全書をプレムサガル Prem Sagur 書の摸擬と思ひ定む然どプレムサガル書は紀元後第十二世紀に出來たる書物にて新約全書の摸擬なる証據あり以て彼等の迷を解に足る

第十五章　祭司の事

婆羅門教に於て祭司をグル Guru と稱すグルは祭司と云ふ意味あり師匠と云ふ意味ある詞なりウエダンタサラ Vedanta Sara 書を見に凡てグルは罪の根を拔き去り穢を洗ひ清め義に山て善を行ひ德を修め己を愛する者も己に敵する者も同じ取扱を爲一人の迷を解と在り是は基督教の祭司に異なる所なしグル卽ち祭司の位に階級あり祭司の長は寺の續に院を設け院の中に住み一搬の祭司を指揮し祭司は都て妻を娶ず嚴重

に規則を守る而て之が階級と規則を調べ見に基督教の祭司れ階級と規則に毫も異なる所なし

第十六、十七章　山伏の事

婆羅門教に於て山伏をウハナプラタ Vanaprasta と稱し嚴重なる規則あり之を調べ見に基督教に於て各門派の修行者が守る規則に能く似り卽ち左の如し

一山伏は市街を離れ山野に住む可し
一世人と交際を遮斷す可し
一茅屋に住居す可し
一衣服は木葉を重ね草の糸を以て縫ふ可し
一食物は山野に在る草木の實に限る可し
一清水を以て身を清め毎日三度祈禱す可し

一常に默想し心を神に捧ぐ可し

昔時は婆羅門師の中に山伏の規則を守る者が多く在て之を他人の修行と稱し衆人に尊崇されしが今は絶たり

第十八、十九章　行者の事

サニヤアシ Sannyassi と稱し嚴重なる規

婆羅門教に於て行者をサニヤアシ Sannyassi と稱し嚴重なる規則あり是は基督教に於て各門派の修行者が守る規則に聖洗と悔罪の意を雜へし者の如し即ち左に掲ぐ

一清水を以て身を清め心を清る徴と爲す可し

一頭に灰を冠り罪を悔む徴と爲す可し

一男は妻を持べからず女は夫を持べからず

一月に一度必ず頭髮を剛除す可し

一食事は一日一度たるべし

一人の施物を受て生活す可し

一河岸に小院を設け住居す可し

一市街に於て暫時も停足すべからず

一常に箇の在る杖を携帶可し

一宜く神を祈り智を求む可し

サニヤアンの常に携ふ箇の在る杖を見に舊約の聖人エリヤ Eliyas モイゼス Moyses 等の常に持る杖と同じ

第二十、二十一章　祈願の事

婆羅門教に於て瑜伽 Yoga と稱る祈願の法則あり祈願宗の座禪とも云べき者にて四段に分れ一をサロカと云ひ二をサミパと云ひ三をサルパと云ひ四をサユジヤと云ふ

サロカ Saloka は同じ所と云ふ義にて心を神の前に止る事なり

サミバ Samiba は近と云ふ義にて世を離れ神に近く事なり

サルバ Sariba は似と云ふ義にて神に似る德を求る事なり

サユジヤ Sayudjya は一体と云ふ義にて人の心が神の心と一体に成と云ふ事なり

此等の事は都て基督教の默想より出たる証據あり尤も洪水の後は世界の人類が悉く一体の天主を能く辨へ恩を謝し惠を求る爲め專ら天主に祈願しアブラハム Abraham モイゼス・ダビド David 等の聖人は祈願を以て第一の勤と爲り天竺の人も初の程は一体の天主を能く辨へ恩を謝し惠を求る爲め天主に正當の祈願を爲しが後には迷に陷り天主を忘れ偶像の前に不當の祈願を爲に至れり

第二十二章　世終の事

婆羅門教の聖書に就て世終の事を調べ見に都て新約全書に在る基督の預言に能く似り因て左に之を對照す

Mahabharata 大職書	Tin.otheo 新約全書
世の終る時は惡が三本の足を以て世に立ち善は僅に一本の足を以て人の間に立つ而て惡なる者と驕れる者は眞を亡し命を縮め慾に迷ひ怨を懷き互に敵の如く怨り爭ふ	十モテ後書三章二節に曰く世の終る時は人が己を愛し他の害を顧ず慾と驕を以て親に背き子を憎み互に讒言して和睦する心なく天主の愛を忘れ毫も天主を愛する事なし

Mahabharata 大戰書

摩拏 Manu の血統に出ー者が互に敵の思を爲し憤怒と我慢を以て他に害を加へ物を望み爭そひ婆羅門 Brahmo 師刹恒利耶 Kshatriya 師輸達羅 Sudra 師なんどは外面に善を粧ひ善德を商買と爲す事あり

新約全書

ペトロ Petro 後書二章一節に曰く汝等の中に僞の師が現れ僞の說を傳へ眞の救主なる天主を棄さし亡べ他己の黨を募んと欲する事あり彼等は虛き利を望み汝等に商賣する者なり

Mahabharata 大戰書

天地の規則が亂れ四季の氣候が變り雨は瀧の如く降り海岸は嘆く遊星は光を失ひ空の石は落て火に燒れ人は寶を食る爲に義と愛を忘れ國王は頻に戰ひ人民は猥に爭ふ事あるべし

Luc.. Matth. 新約全書

マテウス廿四章廿九節に曰く日は暗く月は光を失ひ星は地に落ち天の勢ひ動き震ふ事あり

ルガス廿一章十一節に曰く民は民を攻め國は國を攻め各所に地震饑饉疫病の恐れ在る可し

Mahabharata 大戰書

親が子を殺し子が親を殺し夫が妻を刺し妻が夫を刺し血は流れて川の如く屍は積で山の如し斯る混雜の最中へ天空に一の赤き物が顯れ忽ちラグ Raghu と云ふ星が太陽を陰し地上冥暗と成る

Matth. 新約全書

マデウス十章廿一節に曰く兄弟が兄弟を殺し親が子を訴へ子が親を訴へ死に渡す事あらん默示錄六章十二節に曰く第六番の封印を開く時に日は忽ち黑く成り月は血の如く赤し

Mahabharata 大戰書

火の雨が降り地上の萬物を燒き人は親子夫婦親族朋友悉皆離散し東へ逃る者あり西へ走る者あり混雜一方ならず遂に火は地上に散亂し地上は火の中に人の叫ぶ聲を聞く耳と成べし

Petr. 新約全書

ペトロ後書三章七節に曰く今の天地は審判の火に燒る可し天主は之を審判の時まで存せり默示錄六章十五節に曰く地の諸王貴人富者將軍勇士奴隸一切人間は洞と巖の中に匿れ迷ふ

第廿三、廿四章　天國地獄の事

婆羅門教に於て天國をパラデザ Paradesa と云ふ是は羅馬語に天國をパラジゾ Paradiso と云に同じ誰でも御承知の通り今尚イ|キリスフランス等の歐州の語にてパラヂズと云はれるなり尤も婆羅門教に說く所のパラデザは幸福を受る國が多く在て受る所の幸福も肉体の幸福が多き故に基督教のパラ|ジゾと大に異る者の如く見も然ど極点に至り若し人が絶ず善を行ひ此世の塵垢を棄る時は靈魂が清り上靈波羅婆羅賀磨 Paradrahma 大神と一体に成り無限の幸福を受く蓋し一滴の水が海て原の海水と一体に成が如と云ふ所は基督教のパラ|ゾに能く似り

婆羅門教に於て地獄をパタラと云ふ波頭摩富爾那 Padma Purana

書に曰く波吒羅 Patala は惡人の靈魂を罪する所にて火刑を受る如き苦み常に絶ず啼き中に人の叫ぶ聲は耳を貫き惡き臭は鼻を打と在り是は基督教に說く譬の說に同じ尤も婆羅門教に於て輪廻と稱し惡人の靈魂が地獄の苦を果し再び世に生れ來る說あり基督教に說ざる所なり

婆羅門教論卷之一終

天竺國民と成し各蕃土人の種類と宗教習慣の根本

爰に婆羅門教の聖書の基督教の聖書に相似る箇條を綿密に調べ揭たれば今其聖書を組立たる時代を說んと欲する前に當り且づ確乎たる証據を示す爲め古く書に徇り天竺國民と成り各蕃土人の種類と宗教習慣の根本を說ざるべからず

凡そ國民と稱する者は初め異種の人類が貿易の爲め或は戰爭の爲に一時雜居し漸次親密の交際を爲し遂に同一の言語を用ひ同一の法律に從ひ同一の宗教を奉じ以て成立たる者なり

天竺國民も之に外ならず歷史を繙き古代の景況を調べ見に最初は各蕃の土人が四方に割居し互に自己の習慣を固へ守

り言語も法律も宗教も咸な異る者を[illegible]ひ聊か一致する模様なかりし

是は最と古き事にて紀元前六百年の項アガスチヤ Agastiya 師が中天竺へ入り時に早此景況なりしが紀元前四百年の項蓋摩訶茶羅 Ramachandra 王が戰爭の爲め錫蘭 Ceylon 島へ渡し時も各蕃土人の兵を見たる事あり倘は詳く知んと欲せば請ふ其項の史を看よ

其後婆羅門教の元祖阿利耶 Ariyas 人が猛威を震ひ來て有名なる彼嵐迦 Ganges 河信度 Indus 河の傍に居を占め名蕃土人を強て服從せしむる爲め數回干戈を動し遂に服從せざる者を遠き山間林中に押籠彼等を輕蔑してダシユズ Dasyus (奴隸) 羅又婆 Rakshasas (鬼の類) ニサダ Nishadas (醜き蛇) と名け彼等が禀け得ー

天賦の白色を奪へり此事は梵字の古書讃論 RigVeda 又富羅那 Purana 書なんどに詳く見る

此阿利耶 Ariyas 人は白色にして他蕃土人の黑色黃色なるを賤め初の程は結婚せざりし故に區別甚だ嚴たりーかば茂遮達摩 MotchaDharma 書に婆羅門教人を婆羅門教人ならざる者の區別は顏色を見て知べし婆羅門教人は白く婆羅門教人ならざる者は黑く或は黃なり云々と在り然ど日を累ね年を經に從ひ互に親く成り遂に結婚して種を雜へ一のトラニヤン Turanian 人と成たれば今は顏色を見て區別する事あたはず茂遮達摩書の譯合は番餅に屋せり

其の如く天竺國民は各蕃土人の混合して成立たる者なり而して各蕃土人は皆ノエの子三人の子孫に外ならず盡し古眞に

洪水の時ノエ夫婦と其子セムのハカム Cham ジャベット Japhet 夫婦都合八人のみ殘り他は悉く溺死したる事を載せ其後セムは亞細亞の先祖と成りカムは亞非利加の先祖と成りジャベットは歐羅巴の先祖と成て再び世界に人類の繁殖したる事を掲げ是には確なる証據も在て人の信ずる所なり今其三人の子孫にして天竺國民と成り各蕃土人の種類と彼等の宗教習慣を說く左の如し

第一章　カム Cham 八種の事

天竺國民と成し各蕃土八の中に黑色なる者はカム八種にてカムの子クス Chus の血統なりヘブレヤ Hebreo の原書を調べ見に

カムは火に燒と云ふ意味にてクスは燒た顏と云ふ意味なり

舊ギリシヤ Grecia 歷史に此種の人をエチヤビヤ Ethiopia 人と云ひ

燒た顏と名く

舊ギリシヤの學士ホメール Homere 氏の說にエチヤビヤ人は東西に別れ亞細亞と亞非利加に住と在り又た舊ギリシヤに高名なる歷史學者ヘロドット Herodote 氏の說に亞細亞のエチヤビヤ人と亞非利加のエチヤビヤ人は詞の異る耳と在り大アレキサンドル Alexander 王の日記に天竺のエチヤビヤ人は黑と認めエヂプトの Egypt 地理學者プトレメ Ptolemee 氏の著書に同名同種の蕃が多く天竺と亞非利加に在る事を載たり則ち天竺の陀歷 Darudas と云ふ蕃は亞非利加の陀歷と云ふ蕃に同じき類なり今尙天竺にダチールヅス Daurds と云ふ蕃あり是は梵字の原書に在る陀歷と云ふ蕃の後なるべし

舊約全書にカムの孫にてクスの子たる天竺のチムロド Nimrod

王かバビロン Babylone と云ふ街を建と在り而て今尚此街の古跡あり又た中亞細亞の闊悉多 Khushistan 國に住む人は皆な黑色なるが其國にクシと云ふ街の古跡を存しクス Cius の子孫たる証據と爲す此血統に婆羅門教の一藩あり之を毘奈密多羅 Visvamitra 藩と云ふ

富蘭那 Purana 書の中に多く黑と云ふ意味の名を附たる藩あり例て云ば加羅鄭若 Kalakanja と云ふ藩の如き之をギリシヤの歴史に質す時は黑色なるエチヒヤ人と云ふ意味にて則ち加蘭停 Callatis なり

地理學者の說に依ばカムの子孫たるエチヒヤ人が中亞細亞を出ユウフラテス Euphrates 河の岸を下て兩に別れ一は波斯 Persia を經て天竺に入り一は大夏 Arabia を經て亞非利加に入り

し証據數多あり

天竺は國民の中に大なる等級ありて彼波里衣 Parias 藩人の如き最も下等に位する者は深く輕蔑せられ他藩の人と交際する能はず是は他國の人も能く知る所なり天竺に於て日本の事を評するに昔し婆羅門教の壞たる佛教が日本に入り天竺の風俗を移て人間の等級を定たりと云ふ夫は兎も角も此波里衣藩人は闊悉多 Khusshite 則ちカム人種なる証據を古典古跡に多く認る所ありて賤しべき者に非ず全く婆羅門教の藩人が天竺に入り風制を以て彼等を山間林中に押籠交際を斷し者なり

摩拏 Manu 律法十章五十一節に扇茶羅 Chandalas (賤民) は村内に住む事を許さず尋常の人民と交際する事を許さず云々と嚴重

なほ規則あり是は甚だ天理に背き公法に戻る者なれば今を距る百年以前より歐州の政治家が基督教を注入し彼輩に同等の權力を得せしめんと欲し專ら力を尽すと雖も多年の習慣一時に洗除する能はず併ながら早晩基督の光に照され斯る暗の中を歩む者なさに至ならん

第二章　トラニヤン Turanian 又シチヤ Scythia 人種の事

是は種を雜たる者あり雜ざる者あり故に外面を見て區別する事あたはず天竺各地に散在せる土人の習慣と其基を調べ初て知る者なれば彼等と交り深からざる人の悟り得べき事に非ずざるなり

昔ギリシヤ Grecia の地理學士ヘロドット Herodote 氏の説にシチヤと云ふ國の人は歐州ダヌブ Danube 河の近傍より中亞細亞支

那天竺まで蔓延すとあり又エヂプト Egypt の地理學士プトレメ Ptolemee 氏はシチヤ國の中に別々の種人數多ある事を述べ其中現今天竺に殘る種の名を載せペルシヤの古き歴史に都て此等の種人をトウラン Turan 人と呼びトランと云ふ書に之をトラニヤン人と云へり

此トラニヤン人シチヤ人の名は紀元前七百年の頃シルス Cyrus 王アレキサンドル Alexander 王のメドチ Meds 戰爭の時に顯る諸國ペルシヤ及ギリシヤの歴史を繙き其頃の景況を知れ

昔約エゼキエル Ezechiel 預言三十八章にシチヤ國ゴグ Gog 王に服從せる人民の目錄あり其中にペルシヤ人はセム Sem の血統エチヤピヤ人はカム Cham の血統モブコブイタ Moscovite 人ゴチルワ Gaulws 人トルコ Turcs 人はシヤペット Japhet の血統なる事を明

かに揚たり然ばトラニヤン人は概ね雜種人にて其中ヲヤベットの血統亘多なるべし

此雜種人を梵語に輸達羅Sudras と云ふ輸達羅は職人と云ふ意味にて舊ギリシヤの歴史にスドラセSudraes と呼び彼等毓迦Ganges河の傍に住と在もの是なり初め婆羅門教徒が天竺へ侵入し歴制を以て此輸達羅藩人を百般の職業に使役し遂に此名を負しめたるなり中には婆羅門教の律法に從はざる者ありて寇に混雜なれど肝要の所を採り之れが大畧を説く左の如し

第一　モンゴリヤ Mongolia 人

婆羅門教の歴史諸論 Rig Veda 書を讀に一ツ種ダヂユ Dasyus 人と稱する者あり雪山 Himalaya 山の南に當り印度支那緬甸の間に在る

山の中に住み婆羅門教の根本たる阿利耶 Aryas 人の領地を掠に來る士人にて黑色に酷惡なる顏面は恰も牛の如く鼻は歴縮られて天を仰ぎ口は引開られて地に向ひ髮は赤く眼は褐色なり

是はモンゴリヤ人の血統にて其中那迦 Naga s と云ふ小藩あり佛教の歴史を見に那迦は蛇と云ふ意味にて先祖い蛇より產れ自ら大蛇と呼ーが漸次に子孫繁殖して一ツの大藩と成り紀元前六百年の頃嚴迦河を渡り大なる蛇の族を建て天竺に入りベナレス Benares 地方に居を占め別て數多の小藩と成しかど皆紇扇那伽 Sechanagn 王に服從ー此王の子孫十代の間は最も勢力ありしが紀元前三百十七年に至り佛教の歴史に有名なる謀月 Chandragupta 王に亡されたり

佛說に釋迦の修行する時那伽人二名が常に奉仕したりと云ひ又那伽人は白晝人間なれど夜は蛇の形を顯す所し佛教を熱心に信じ舍利を建たりと在を以て佛教に蛇を拜む習慣あるを知る可し

第二　プリンダス Pulindas 人

天竺に梵字の地誌ありて五十六國の事を揚げ其中にプリンダス人の名を載たり亦エヂプト Egypt の地理學士プトレメ Ptolemeus 氏の著書にも此名の在を以て調べ見に是は大力ある黑色の蕃人にて婆羅門教に從ひ午ら婆羅門教の戒律を守らず平素肉食して勇氣を養ひ我儘を爲と雖ども正直に忠義の心ある者なり初め一蕃なりしが後に別て二蕃と成り一を拘栗 Koles 蕃と云ひ一をゴチン Gonds 蕃と云ふ

拘栗蕃人はチリサ Orissa 山の麓より嶽迦河の傍まで廣り昔時彼等の都なりーコルコンド Golconda 城下の景況が當ローマ Roma の歷史に在る程の事なれば最も古き蕃なるべー

ゴチン蕃人はベンガル Bengrala 府の南訶鉢唎 Codavery 河の邊に住みヤリノ(山人)と呼れ竟も野蠻の惡弊を除去する心なく常に禽獸の肉を供て僞の神を祭り時に或は人を殺ーこれを犧牲に爲る事あり梵字の古書に此ゴチン蕃人を不潔の蠻民と記し大職 Mahabharata 書の一の卷に彼等の王の一人たる那爛の履歷を載たり

第三　各地に散在せる小蕃土人

天竺の東部達槪拏 Deccan 領より中央伽陀 Gates 山麓を經て西部持瓔珞 malabar 海岸まで各地に散在せる小蕃土人は大に言語風

俗の異なる者あり古蕃古跡の証據に山て之を調べ見るに是は皆なトラニヤン Turanian 人にて婆羅門教の天竺へ入ざる前より住し者なるが阿利耶 Ariyas 蕃人に壓制せられ全く之に從ふ者は上蕃と成り表に從ひ裏に從はざる者は中蕃と爲られ内外ともに從はざる者は下蕃とーて賤められ遂に三等の階級ある者と成たるなり

伽陀山の南より錫蘭 Ceylon 島には多くベデ Bede 人ありエヂプトの地理學士プトレメ氏も著書に此ベデ人の事を揚たり又波利 pallis 人を多く認む目波利語に翻譯せー婆羅門教の聖書も認むる事あり

屋裕羅 Mursour 領には多く波羅毘 Pallavas 人ありて波羅毘國王の古跡を存す蓋は婆多羅 Sidras 府の山中より堀出たる七棟の寺院なり佛教の歴史に高名なる羯蟬揭羅 Cajiveram 城は初め波羅毘 Pallavas 國王の所有なりしが婆羅門教徒の爲に奪はれたり紀元後六百年の頃に支那の行者たる玄々元奘が天竺へ渡り此羯蟬揭羅城の結搆を見て佛教の盛大なるに驚きし事あり

尼羅漸 Nilagiri 山の麓に住む者は多く俱迦利 Kulars 人なるが已の力を輔に獨立を圖り一人も婆羅門教に從ふ者なく獸類を飼て生活を爲し格別に死人を拜む習慣あり

第四　豐折羅 Guzarat 領の蕃人

豐折羅領にも數多の小蕃土人あり其中揭利呵娑 Grassyas 人シヤロン Charons 人提羅 Dheras 人なんど最も多し

揭利呵娑人は廣大なる地面を有し耕作を爲に他の蕃人を奴隷の如く使役し大に勢力ある者なり

シャロン人は神の血統と稱し各蕃土人の間に立て事の中裁を爲し特に尊崇せられ自ら亦た義に進と稱し命を惜まぬ風あり

提羅人は波里衣 Pariｈ 人の如く賤められ他の蕃人と交際する事を許されず日本古代の穢多に髣髴たり

第五　マラバル Malabar 海岸の蕃人

是は今のボンベ Bombay 領にて數多の小蕃土人ある中に最も勢力を有する者はパルシ Parsis 人なるが先祖は波剌斯 Persia の天文學士にて回々教の爲に本國を逐れ此地に來れる者なり今尚先祖の遺傳に由り火を拜む習慣あり火の上に拜する姿を阿耆尼 Agni 神と云ひゼンアベスタ Zend Avesta と名る聖書を持り死人は埋葬火葬など爲る事なく高き堂の上に置て肉を好む鳥の來り喰を待つ寔に情なき業にて彼恒河河の邊に住む土人が流の水に罪の汚を清と云て死人を河の中へ投じ未だ息絶ざる病人をも投ずる事の在と一撮の慘狀なり

此持瓔珞海岸に一種セマル Chemars 人と云ふ下等の小蕃あり古跡の証據に由て調べ見に是はカム Cham の血統にして亞非利加人の別なるが者特殺羅新蓋摩 Parasu Rama 王の壓制に自由を奪はれ婆羅門教徒の奴隸と成たるより常に身を賣買せられ人間社會の外に在りが近頃英領と成て斯る惡弊は掃除せられしかど多年習慣の餘波は全く消滅するに至ずして今尚年期を定め彼等を雇配に使役する者あり

コシヌ Cochin 府の近傍にジユデヤ Judea 人の二蕃あり一を黑ジユデヤ人と云ひ一を白ジユデヤ人と云ふ黑ジユデヤ人の先

祖は紀元前八百年バビロン Babylon のナブコドノゾル Nabuchodonosor 王がゼルサレム Jrusalem を亡し人民を己が屬國へ移せし時に天竺へ來れる者にてモイゼス Moyses の五經のみを聖書と信ずるサマリヤ Samaria の血統なるが子孫は日を經て他の土人と結婚し遂に黑色と成たるなり白ジユデヤ人の先祖は舊ロートマのアドリヤン Adrian 帝にゼルサレムを亡され逃て四方へ散亂せし甲乙が紀元後四百年に天竺へ集り一の小藩と成し者なるが子孫は他の土人と結婚せずジユデヤ人の本色を維持せるなり

第三章　阿利耶 Ariyas 人種の事

天竺の阿利耶人は三に分れ一をブラマと云ひ一を刹恒利耶 Kshatryas と云ひ一を毘舍多 Vaissyas と云ひ之が總稱を提闍と云

舊亞細亞圖

セリカ
支那
西藏
雪山
婆羅門邑
西印度
昌羅閣補羅
阿部山
三佛齊
歡喜
翟斯羅
尾底山
西竺
波斯
波斯國
阿利那國
蕃
ソヤニラド
ヒルカニヤ海
ヒルカニヤ
ヒルカニヤ國
ヒルカニヤ海
ヒルカニヤ海
ヒルカニヤ海

ふ提圀Dwidja は再生と云ふ事にて則ち秘密の儀式を授り再び生し人なれば他の人より尊しと云ふ意味なり

舊ギリシヤ Grecia の學士ホメール Homere 氏の説に阿利耶は尊貴と云ふ意味にて中亞細亞の部分に阿利耶と云ふ國ありペルシヤの南に當と在り又た舊ギリシヤの學士ヘロドット Herodote 氏の説に阿利耶と云ふ國はメド Mede 國の中に在と云ふ而て此メド國の人はシヤベットの三男マダイ Madai の血統なる証據あり然ば阿利耶人は歐州諸國の人と同くシヤベット Japhet の子孫と斷言せざるべからず

阿利耶人が歐州諸國の人と同くシヤベットの子孫なる証據は語の中にも明かに顯はる則ち彼等の古語梵 Sanscrit 梵語とは舊ペルシヤ語ギリシヤ語ラチン Latin 語ゼルマン German 語と

同じ動詞の變交あり是れ同じ語にて同じ血統の証據なり斯く同じ語を用ひ、同じ血統の証據ありて別々の名を呼ぶ組あり則ちインドヨウロッパ IndoEuropa インゼルタレ IndoGerman 阿利耶ジヤベット等なり

有名なる英國の博士マクスムレル Max Muller 氏は阿利耶國の語を細に調べ之を大別して南北の二部と爲し更に細別して南部を二と爲し北部を五と爲す南部の一はイラン Iran 則ち雪ペルシヤ語にてパルシ Parsi ゼンド Zend 及び今のペルシヤ、アルメニヤ Armenia の語なり二はインド則ち天竺の古語にてサンスクリット語波利 Pali 語の類なり北部の一は舊スコットランド Scotland アイルランド Ireland 二はポルトガル Portugal イスパニヤ Hispania イタリヤ、フランス、ラチン三はギリシヤ四はスラブ Slave

ロシヤ Russia プルシヤ Prussia 五はゼルマン、イングランド England オランダ Holland 等の語なり紀元後一千七百六十七年にポンヂゼリ Pondichery 府の學校長なる宣教師が佛國文部省へ提出せし書面にサンスクリット語ギリシヤ語ラチン語の相似る箇條を字引の如く列記し是は文典の交際より成立たる者に非ず全く同じ血統の人類なりと論じたり

英國の學士ウイルホチルド Wilford 氏は黑富蘭那 Vishnupurana 書を英語に翻譯してポンゼリ府の學校長と同じ說を爲し且婆羅門教の變化は各番土人の習慣より成立たる事を述べ次に梵字の書蓋摩耶那 Ramayana 書大羅 Mahabharata 書摩拏律法なんどを引てベンガル Bengale 府達槪拏 Deccan 領オリサ Orissa 領に古く土人の住し証據を揚げ印度人阿利耶人の出所は梵字の書類に